

551
206

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 $\frac{3}{10}$ 1 2 3 4 5

始





事記と萬葉

大正
15. 6. 22
内交



例言

- 一、著者が、我が國の古典たる古事記と萬葉集を讀んで行くに際して、琉球の言語其の他の風俗を以て、解決のつく條々を書き集めたのが本書である。
- 一、言語は、主として現代の標準語としては已に死語となつて居るものについて、比較研究を試みたけれども、必要に応じては現代の生語にも論及した。中には學者間に異論の多い言語に對して解決を與へんしたものもある。
- 一、琉球語は、現代の生語のみを採り、文献の上のみの言語は務めて避けることにした。
- 一、本書に表はれて來る琉球の風俗習慣等は、特に古代の風習と比較しようとして殊更に書いたので、現代の琉球のそれとしては殆ど滅びつつあるものである。風俗習慣の如きは、詳論せねばならない個所も多々あるけれども、別に機會もあらうと思つて概論に止めておいた。



一、本書は緒論に於いて琉球語の言語系統上の位置を鮮明にし、併せて其の音韻及音韻轉訛、品詞等について概説を試みた。土俗等については概説を省くことにした。

一、比較研究すべき材料は、本書に於いて論じた以外にも尠くはないけれども、一層論究を深くして後日の機會を俟つことにした。

一、附録として、琉球の業平たる伊敷屋朝敏の家集中から、『貧家記』と『苔の下』を出すことにした。以つて古琉球の一部の貴族社會に於ける、國文和歌の研究の情勢を明らかにすることが出来よう、之を以つて直ちに琉球語が國文和歌の影響を受けたものと斷ずることは余りに早計である。少くも古琉球に於ける教育の普及状態の一斑を知る人士は肯定しないであらう。

一、本書記述説明の体が一定しないのは、其の折々に書いておいたのを、其の儘取纏めて了つたためである。

一、本書は、著者としても單に研究の一端で、猶研究を深めて行く可き事が多々ある

敢て発表を急いだのは、滅びつゝある古琉球の此の種の研究に多くの人の手を煩し度いからの微意に外ならないのである。

大正十五年一月五日

岳南の寓居にて

著者記す

目 録

例 言

(一)

緒 論

(二)

一、古典研究としての方言

(一)

二、琉球語は果して異國語であるか

(三)

三、琉球語と古事記萬葉集

(一九)

四、琉球語の音韻について

(三三)

五、琉球語の音韻轉訛について

(二六)

六、琉球語の品詞について

(三三)

七、其の他に就いて

(三四)

古事記の部

開闢神話

ひろ
ひる子
みぎり
な(汝)あ(我)
ぬ
け
ほさ
ゆ
たぐり
黄泉神話
たかる
ひりひ
はむ

ひら
ごさ
うぶや
はらひ
も
みけし
のる
うづ
くびだま
あらぶる
おさなひ
三きだ
みそ
にへ

あそび
もろく
しめなほ
やらひ
まかなひ
うらなふ
か
かむ
あかはだ
よむ
まるぶ
おも
まぐ
よばひ

さよむ
うはなり
らめ
おさ
かしは
猿田毘古神
そりりさ
くく
はふる
海神神話
いろこ
のぎ
たしなむ
やぐさみ
つこめて
のる

いが
さやる
ひびく
がり
たたみ
いめ
三輪山神話
へそ
さる
みつぎ
あさらふ
かなし
くたす
にし
ひしぐ
たち

ころも
やはす
にみし
いひ
ひる
おすひ
さはり
しし(肉)
かむがかり
こがね
なから
いひぼ
さもらふ
ぬびる
ほつもり
あから

萬葉集の部

ねじ
けぶり
つくらふ
ひ
やる
かたる
こ
みふぐし
な(希望の助詞)
ゆふさり
はがひ
よろづ
さやか
あかさき

かひこ
あやし
あたら
まま
しきみ
かくむ

あがき
ゆふ
たぐ
しぐれ
しほす
た
をす
まぐさ

よこす
やから
たけ
しし(猪)
あきづ

わらは
こもりね
たび
みる
かかふ
ひた
しま
はまゆふ

たぎつ
さで
はへ
いざり
ぬき
かぢざり
たまさか
い
おそ
みやぶ
うへ
きも
おもふ
歌垣
あなくび
ひたを

ませ
しぬぶ
うむ
まつほる
このぐもり
やのさ
ひつ
かぎ
ひる
かつ
たばる
しただみ
こさひ
うなぬ
なつかし
あや

あから
つさ
たもさほる
のこふ
はつれ
しし(父)

附 録

貧 苦 の 下
家 記

一五

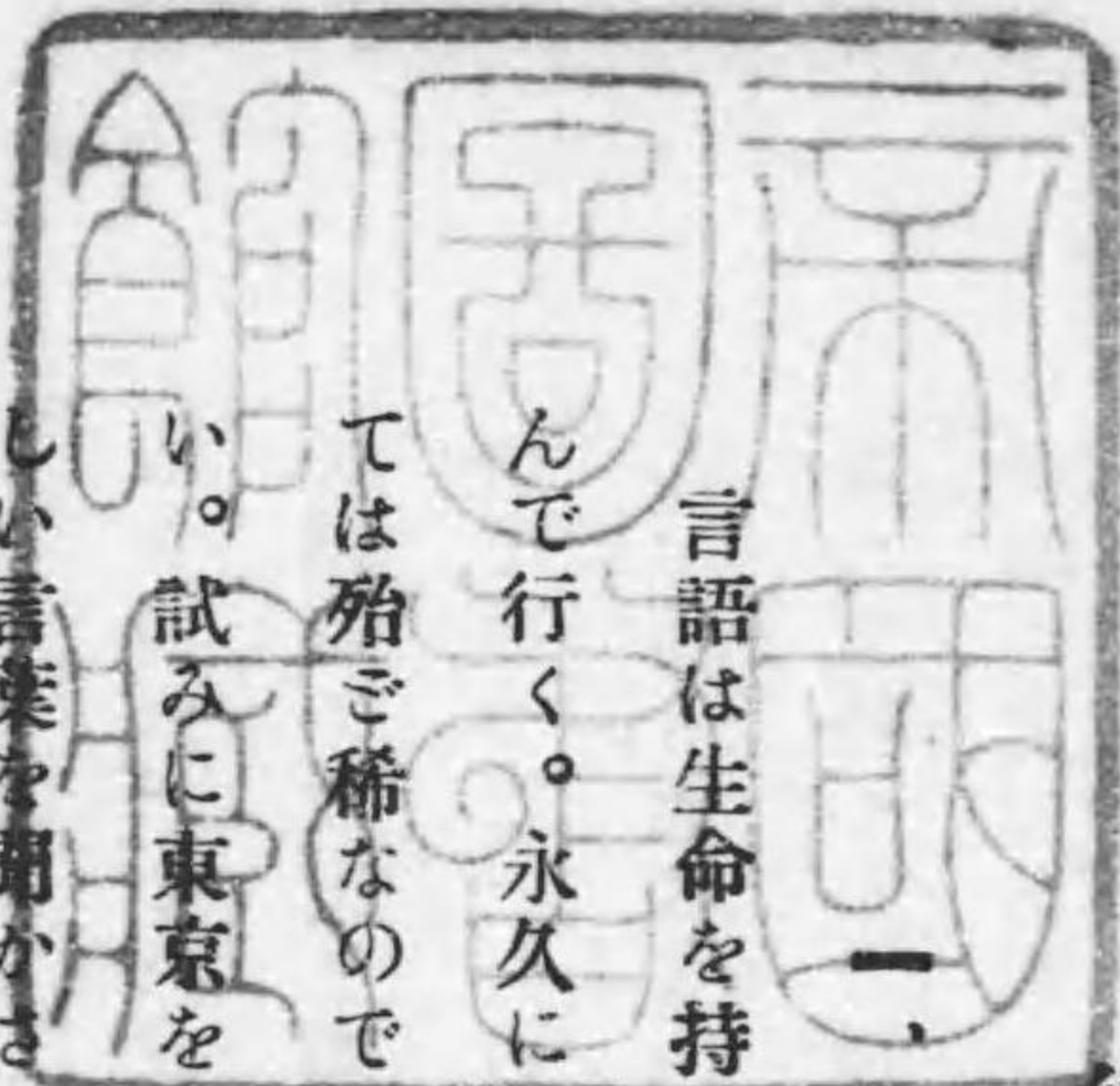
一六

一七

琉球人の見た **古事記と萬葉**

奥里將建 著

緒 論



古典研究としての方言

言語は生命を持つて居る。而して絶えず生れ、絶えず發達し、絶えず衰へ絶えず滅んで行く。永久に生き、永久に同じ形を存し、永久に同じ内容を保持する言語と言つては殆ど稀なのである。言語は文化の新陳代謝の旺な地域ほど、其の盛衰榮枯も著しい。試みに東京を去つて、二三年後再び東京に還つて見る、曾つて耳にしなかつた新しい言葉を聞かされ、又曾つて聞いた古い言葉でも、全く新しい意味に聞かされて吃驚する場合が度々ある。其のさまざまの事情と環境とに依つて一旦發生したところの言語は決して其の地域ばかりには止つて居ない。交通が頻繁で文化の新陳代謝が旺な

地方には所構はず流れ込んで行く。教育が普及し、印刷文明が著しく發達した現代にあつては、其の流動作用が殊に著しく、言語の統一を一層機敏迅速ならしめて居る。然るに我が國は、元來細長い交通不便な島國であり、教育の普及もはかなく、しくはなかつた。それが言語の普及統一には大なる障壁となつた。殊に近世徳川氏三百年間の鎖國の政策と關所の嚴壁とは、我が國語の發達統一のためには異常な障壁を來したのであつた。ためにそれ程廣くもない日本の國土内には、自ら幾多の言語區域を形成し、鳥も通はない島々には、宛然異國語を思はせるやうな言語が遺存せられるやうになつて終つた。所謂現代日本の文化の發達に、大なる障壁を與へて居る方言なるものが即ち之である。

奈良朝から平安朝にかけて、唐土の文物の移入に汲々として余念のなかつた我が國は、言語の發達の上にも一層の目醒ましいものがあつた。然るに話し言葉は時々刻々に變遷するが、一旦記録の上に表はされた言語は、永久に同じ意味同じ形を保存して

行く。茲に於いてか、大伴家持に依つて編纂された萬葉集は、縦合表現法の罪はあつたにしても百數十年後の村上天皇の朝には、已に訓點を施さなければ讀解に困難を來し、降つて鎌倉時代には、更に僧の仙覺をして訓釋せしめるに至つたのである。けれども其の距離は、其の時代の帝都の言語と萬葉集中の言語との距離であつて、萬葉集中の言語と地方の言語との間には自ら密切な關係を見出すのであつた。其の關係は現代の方言との間にも依然として保たれて居るのであつて、時代が經つに隨つて段々難解なものとなつて來た、日本最古の文献たる古事記、日本書紀、風土記、萬葉集の研究には、各地方の方言、土俗等は與つて力あるものである。琉球民族の有つて居る言語が、均しく日本の一地方の方言であることすれば、各地方の方言の如く、我が古事記萬葉集等の古典の研究には貢獻するところが頗る大なるものがあらう。これから少しく夫れ等の關係を明かにして見度いのである。

二、琉球語は果して異國語であるか

『琉球人はその體質日本人に酷似して、モンゴリヤンのタイプを有して居る。彼等の祖先は、曾つて共同の根元地に住してゐたが、紀元前三世紀の頃大移住を企て、對馬を經過して九州に上陸し、其の大部隊は道を東北に取り、ゆく／＼先住人民を征服して、大和地方に定住するに至つた。其の間に南方に逍遙ひつつあつた小部分の者は、恐らく或大事件のために逃れて海に浮び、遂に琉球諸島に定住するやうに至つたであらう。それは地理上の位置でも傳説の類似でも言語の比較でも容易く説明される。』

『この二國語の文法を綿密に比較すると、語詞論に於ても措辭論に於ても、根本的一致の存在するこゝがわかる。しかも其の一致たるやスペイン語ミイタリー語との間に於ける一致の如きものである。單語の場合に於ても亦同様なこゝが言へる。もしこの兩國語の祖語なるものがあつたとしたら日本語は其の祖語の或部分を忠實に保存し、琉球語はその祖語の他の部分の忠實に保存して居る。而も近代の日本語が

上世の日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表するこゝが一入忠實である。それは動詞の語尾變化に於て著しく現はれて居る。要するに二國語の相互的關係をスペイン語ミイタリー語の相互的關係否むしろスペイン語ミフランス語の相互的關係に比較しても大過はなからう。』

上掲の論文は明治二十七年親しく琉球に遊んだ言語學者英人チャンパーレン氏が、琉球人の前に、日本の言語學者の前に亂打した警鐘であつた。

是より前二三百四十年前の琉球の大經世家羽地按司向象賢は、其の『仕置』の中に言語の上から論じて日琉同祖論を提唱し、明治初年の琉球の政治家で歌人八田知紀の門下生たる宜灣朝保は、古事記傳、萬葉集の研究から、日本古代の言語ミ琉球語を比較論究して、向象賢の日琉同祖論に確證を與へた。けれども久しく本家に離れて南島に流浪して居た琉球民族は、交通の不便から本家この音信を久しく絶ち、且琉球國王が明の冊封を受ける等の珍事があつたために全く民族的自覺に缺ぎ、祖國を忘れて

居たのである。随つて向象賢、宜灣朝保の日琉同祖論に耳を貸すものは至つて稀であつた。時の流は彼等の提論を段々解決し去つた。明治の初年に至つて、日支兩屬の自然な生活を久しく續けて居た琉球王國が、再び本家の暖い懷に還つて、明治聖帝の御恩澤に浴するやうになり、降つてはチャンパーレン氏が言語學的立場から彼の警鐘を亂打するやうになつたのに依つて、琉球民族は長い間の迷夢から醒めて、愈々民族的に自覺するに至つたのである。のみならず琉球人を何らの縁もユカリもない赤の他人の南島人として取扱つて來たところの日本政府も、言語學者も、段々琉球人を親しい分家者として遇するに至つた。爾來人類學者や言語學者が、琉球研究に指を染める者が段々多くなり、琉球人中にも伊波文學士や眞境名笑古氏や末吉麥門冬氏等の郷土研究家が輩出して、日琉兩語間の關係は愈々益々明瞭になつて來た。

明治四十二年に琉球に渡つて親しく琉球語を研究して歸つた金澤庄三郎博士は、次のやうな事を言つた。

曾つて或る人から、沖繩縣に行はれて居る言語は支那語だらうかと言ふ質問を受けた事がある。又韓語と支那語とは、同じかと言ふ人もあつた。韓國と支那とは、地理上及び歴史上の關係から、このやうに考へるのも無理はないが、沖繩縣の言語を支那語と混同することは、實に其の無識に驚かざるを得ない。

又金澤博士と相前後して來縣し、琉球語を研究調査して歸つた龜田文學士は次のやうな意味の事を發表された。

沖繩語は、鹿兒島方言、熊本方言のやうに日本の一地方の方言に過ぎない。一寸聞いただけでは、日本語とは全く別種の言語のやうな感じがしないでもないが、深く研究すれば何等の差異も認めないのである。只沖繩は地理上大海中の島嶼であり、且從來他の土地との交通も開けなかつた結果、島内だけで變遷發達を遂げ一種特別な言語のやうに感ぜられるに至つたのである。

斯く大家の説を綜合して見ると、琉球民族が現に使用して居る言語は、大和民族の多

くが使用して居る日本の一方言と均しく日本語中の一方言と見做して差問へない譯である。然り九州と臺灣間に點在して居る大小五十余の島々の住民が操つて居る琉球語は、山形方言、鹿兒島方言等と均しく日本語中の一方言たるに過ぎないのである。宗家たる大和民族と手を分つて以來、八重の潮路をかきわけける海路の不便と、物質生活と精神生活が單純に墮して行つたの、教育が普及しなかつたのに依つて、彼等の言語は大和民族との間に段々大きい溝が出来て、遂に異國語を思はせる現代の琉球語と化して終つたのである。そうして見るに、日本の古典の研究をなすには、我が琉球方言も山形方言、島根方言と同じやうに、重要な研究資料を提供するやうになる。否寧ろ日本最古の古典を研究するには、却つて他の方言よりも極めて適切な資料を齎らすもの、斷言し度い。それは琉球民族が大和民族に袂を別つた當時の言語の原形と音韻とを交通不便な島嶼に落ち着くやうになり、比較的到他文化の刺戟を受けることが尠かつたために他の方言よりもより多く原形を保存して居るからである。依つて琉球

人たる古典研究家が、古事記と万葉集と云ふ日本の古典に接するに實に思半ばに過ぎるものがあらう。けれども是等の事は、單に概論的に關係が深いと、有力な資料を提供すると論ぜられて居るだけで、未だ何等の具体的の研究が遂げられて居ないのは、純然たる琉球語が月に年に消滅しつゝ、ある現態から、我が古典研究の上の一痛恨事と云はねばならない。

勿論一般琉球研究者や歴史家が論ずるやうに、琉球民族は大和民族と袂を別つて以來も、宗家たる本土との交通接觸はあつたであらう。けれども是は極めて一部分の交通接觸であつて、本朝に於ける政治上、文化上の變遷が招致した著しい言語上の推移の影響を受けるまでには行かなかつたのであらう。假令一步を假して影響を受けたとするも、其の波動や極めて微かなものであつたらう。其の證據には、彼の目まぐるしい變動を來した平安朝の言語、殊に有職故實の上の言語の如きは、琉球語の中には殆ど發見することは出来ない。猶又、音韻に於いても母音がア、イ、ウの三音に止り

ハ行音がバ行音、フッ行音で發音されて居り、又、彼の奈良朝あたりからそろ／＼發達しかけた拗音が琉球では今に直音の儘遺つて居るのをもつても知るこゝが出来る。平安朝の物語類等には往々にして、琉球語其の儘、或は原形だと思はれる、古事記、萬葉集等に發見する以外の古語を發見するが、是等は古事記、萬葉集に採録されなかつた古代言語が、上述の物語類の上に、姿を現はしたものであらう。古事記、萬葉集に現はれた兩語の類似語は本集に譲つて、茲には其れ等以外の文献に表はれた古語（今は死語となつた）の中で、琉球語と類似の言葉を少しく拾つて見度い。

△琉球語

いらーすん
いらゆん
いりみ
いみゆん

△古語

いらふ（貸す）
いらふ（借る）
いりめ（入目）
いびる（強請）

いゆ

いしなーぐー

いりがん

いれーゆん

いりち

いくまうこる

いーびがにー

いひぢいー

ちーぬはゆん

ちび

ちるぶん

はねわーかすん

いを（魚）

いしなご（女兒の遊戯）

いれがみ（添髪）

いらふ（答ふ）

いろこ（頭のふけ）

いくまこころ（幾人の敬語）

ゆびがね（指環）

いひがひ（飯貝）

血あゆ。乳あゆ

つべ（臀）

つるぶ（鳥等が番ふ事）

はななやかす

はたかゆん

はべーる

はなふいゆん

ふゆん

ふりゆん

ふぐい

ふく

ふわーし

ふす

ふいちぢぶん

りーぢ

をうつてー

はたかる(よろがりひらく)

はびる(蝶)

はなひる(くしゃみ)

ふゆ(相手をいやがる)

ふれる(達示する事)

ふぐり(陰囊)

ふく(肺臓)

はやし

へそ(臍)

引出物

れんぎ(搗粉木)

をここひ(一昨日)

かーぶちー

かしまさん

からまちゆん

うごなはる(宮古島の方言)

うふるめー

うーに

うごうし

うまじり

うちり

うすまさん

うすますん

るーまーるー

かふち(枳根)

かしまし(五月蠅い)

からまく(絡く)

うごなはる(集る)

おんふるまひ(響應)

おほね(大根)

おこし(陥)

うますめ(石女)

おきれ(燠)

おぞまし

おぞまし(轉義?)

ゆひまわる

くいづくい

こわづくり (聲作り)

くつび

こくみ (いほ)

くぶ (國頭の方言)

くぶ (薪を)

くたび (國頭の方言)

こたみ (今度)

こぞ

こぞ (去年)

くんだ

こむら (腓)

あーぶく

あぶく (泡)

雨風吹ちゆん

雨風吹く

ああたうこ

あなたふこ

あらがーゆん

あらがふ (争ふ)

あかい

あかり障子

たまし

たましい (魂)

たなちゆん

種変心

たぬかすん

そそのかす

たに

たね (男根)

まるちや

まないた

まじむん

まじもの (化物)

まーむすびー

まむすび (真結び)

しち日

節日

したたか

したたか (強く)

じち

じち (實)

ねー

なる (地震)

ねーぢゆん

なわぐ (蹇ぐ)

ゆに

よね (米)

ゆまんぐい

夕まぐれ

めーし (箸)

やーちゆー

むぬ

むぬうみー

むぬめー

むぬいり

むぎうちゆん

んまが

よーがりゆん (瘡せる)

わたくし

わく

わびゆん

まなばし (眞魚箸)

やいこ (灸)

もの (食物)

物思ひ

物参り

物入り

もぎく (教訓なきに)

うまご (孫)

夜離れ (轉義?)

わたくし (公ならぬ事)

わく (糸巻)

わびる (物事に歎く事)

わたまし

ゑんざー

わたまし (貴人の轉居)

ゑんざ (わらふだ)

琉球王國が支那の冊封を受け、日支兩屬の變態的政策を敢て施し、支那との交通も不便ながらも永年續けて來た關係もあり、又支那から久米村人や其の他の歸化人もあつたのだから、琉球人は殆ど全く支那語を操つて居るのではないかと世人も疑ひ、琉球人自らもさう云ふ意識にこらはれて居る。けれども事實は全く意外である。勿論儒教を透しての漢語は國語と均しく大分行はれて居る。又一旦國語に籍をおいてから琉球に傳つた語もあるのであらう。日支兩屬以來直接に支那の時代語の移植されたのは至つて稀で、寧ろ他の英語、伊太利語、和蘭語、朝鮮語等の影響を受けた語が多いであらう。琉球語の語形に大した影響を與へなかつたのみならず、歸化人たる久米村人の生活にすら次のやうな僅かばかりの名詞の中に辛じて命脉を保つて居るに過ぎないのである。此の現象に對しては世人は、全く舌を巻いて吃驚することであらう。

砂鍋 (土鍋)

大碗 (碗の一種)

萬花 (支那製の御飯茶碗の大きいもの)

茶壺 (キウス)

將棋 (日本の將棋を少し異ふ)

杆子棒 (丸太)

洋銀 (銀)

西洋布 (白木綿)

ウキーリン (ネルに似たもの)

トンバンチエー (夏着の反物)

フイーター (袖のある短衣)

フクター (襪褌)

一八

火鍋 (鍋の一種)

茶庫 (携帯用の茶入)

千花 (萬花の小)

岩 (自然石の大きい者)

秀才 (若殿の意)

大人 (父のこゝ)

ウマントウン (王の禮服)

ウメントウ (琉球紙雞)

マーラン (舟の一種)

ポー (麥粉のあげもの)

卷餅 (白いもの)

短褂 (短衣の袖ナシ)

馬褂 (シャツ)

雲菜 (野菜の一種)

香片 (茶の一種)

半山 (茶の一種)

ヌンクー (料理の一種)

ヌーメー (玄米)

燒酎 (泡盛)

パツサイ (唐手の名)

ナイハンチ (同上)

李桃餅 (菓子的一种)

筍子 (たけのこ)

ハイチエー (海賊)

鬪雞 (雞の一種)

狎 (犬の名)

雞頭 (ケイトウのこ)

マヤー (猫のこ)

打花鼓 (樂劇の一種)

痘痕 (アバタ)

三、琉球語と古事記萬葉集

琉球語が、我が國の古典を研究するに當つて何れ位の資料を提供して呉れるか云

ふ事は、前に陳述したところで明瞭である。茲に祝詞、宣命、壽詞、風土記等汎く奈良朝文學に亘つて比較研究を爲し得るなら、一層琉球語の古典研究としての價値、古琉球の文化の我が古代思想に對する關係を明瞭ならしめ得るけれども、到底斯かる一冊子の論じ盡すべきでもなく、又機會は外にもあらうと思はれる。是から範圍を縮めて、奈良朝文學中の古事記、萬葉集と琉球との關係について、深く考へて見たい。

元明天皇の和銅五年（一三七二）に大安麿が、稗田阿禮が暗誦して居た日本太古から推古天皇に至るまでの神話傳説を勅に依つて記述したのが古事記である。古傳説が古事記に依つて蒐集せられるまでには、假りに神武天皇の御即位後と見ても已に千四百年に亘る長年月の事件であるから、如何に強記な語部に依つて語り傳へられたにしても、幾らかの音韻の變化、語句の内容の轉訛等があつた事は事實であらう。元明天皇の朝と云へば、我が國に於いては漢學の浸潤は勿論、佛教文化も相當に花が咲いた時代である。茲に於いてか吾々は彼の古事記の中に表はれた言語や其の中に盛られた

思想が、果して何れ位までか、日本の古來の純粹なものであるかを疑はざるを得ない古事記に於てさへさうだから、それより殆ど一世紀も後れて大伴家持に依つて蒐集せられた萬葉集に至つては、儒教佛教の影響も亦甚しいものであつたらう。

琉球民族の南島移住の時代に對しては、茲に徵すべき文献もなく、又未だ是と云ふ定説も聞かないけれども、地理上の關係からチャンパーレンや金澤博士の説の如く、大和民族がまだ九州にある頃であつたらうと思はれる。するに古事記と萬葉集は、大和民族と琉球民族が手を分つて已に千五六百年以上の後に記録蒐集された譯になる。假令琉球民族の言語が大和民族と手を分つて以來全く變化の道を辿らなかつたにしても、日本の文献に表はれた言語や其の他の文化とは多少の距離を認めねばならない。況して琉球民族の言語や他の文化が、彼等の南島移住以後の交通の不便や氣候風土の影響を受けることの免れ難きに於いては猶更である。彼等は生活の必要に應じて獨特の新語も創作したのであらう。其の時には全く母語の系統を受けない新語もあつたら

うし、縦合系統を受けて居るにしても、ヒムガシをアガリ、ニシをイリと言ふが如き又太陽のここをティーダ（此の語は元來はティーラで照らすの語根だが、其のラがダに轉訛したもの）のやうに余りに酷い轉訛をしたのもあつたらう。或論者の『琉球の古典たる「おもろさうし」が悉く日本の古語（文献に表はれた古語と言ふ意味であらう）を以つて解釋がつかない限り、琉球語は日本の古語と他の言語との合の子であらう。』と言ふが如き説には、もう少し此の邊の消息を明かにして欲しいと言ひ度いのである。元來が素朴單純な孤島生活を押通して來た琉球民族は、語彙に於いても體かに貧弱であらう。又其の南島移住が大和朝廷以前にあつたために、大和時代に異狀な發達を遂げた枕言葉や掛言葉等も、琉球の現代語や古代歌謠にも遺されて居ない。本書に於いて比較研究したいと思ふのも、決して古事記、萬葉集中の言語が悉く琉球語に遺つて居るこの前提の下に企てたのでない事は勿論である。即ち國語が文献に表はれない以前の遙かに太古の言語と古代琉球語とは全然一致するけれども、文献に表は

れて以後の古語と琉球語とは或程度までしか一致しないと思ふのである。けれども國語に於いてはすでに死語と化した古事記萬葉の一部の言語を、琉球語をもつて研究し得ると言ふことは、我が古典研究上詢に嬉しいことの一つと言はねばならない。

四、琉球語の音韻について

言語研究者の第一に手を着けねばならないことは音韻の研究である。琉球語の研究も亦音韻の研究を必要とする。茲に極めて簡単に要點だけを述べて見たい、琉球語の音韻で著しい特色を持つて居るものは、母韻とP音とである。

一、母韻について

母音の中ア、イ、ウの三音が基本音で、エ、オの二音は後に生れた音であることは殊更に論ずるまでもなく、又日本古代の音韻にも其の形跡が偲ばれると言ふ事は言語學者が已に論じて居るところであるが、琉球語の母音にも亦エ、オの二音を發見する事は至つて稀である。エ、オの母音若くはエ、オの長母韻らしく聞ゆる事があつても、

それはエ、オの音から轉訛した二重母韻に過ぎないのである。故に琉球語の音韻は直ちに日本古代の音韻を偲ぶこゝが出来来る。琉球語にアイウの三母音ばかり有つて、エ、オの二母音はないから、五十音圖中エ列音は殆ど凡べてイ列音であり、オ列音はウ列音の儘遺つて居るのである。

△エ列音がイ列音であるもの

タキ(岳)

クガニ(黄金)

ティン(天)

ミー(目)

キー(毛)

クリ(是)

ティー(手)

シリ(後)

井ビシ(エビス)

サデイ(サデ)

ユルヂ(ヨロヅ)

ハタキ(畑)

△オ列音がウ列音であるもの

ウヤ(親)

ムイ(森)

シヌブ(忍ぶ)

クガニ(黄金)

ウットク(弟)

ユムン(讀む)

クス(糞)

カクム(圍む)

マルブ(マロブ)

ンス(ミソ)

チトク(ツト)

クー(籠)

一、P音について

日本の古代に於いて、子音のハ行音は今日の如くハ音ではなく、バ音フツ音ハ音ミ段々轉訛して來たミは上田博士等に依つて曾つて論ぜられたミころである。琉球に於いて文化發達の程度に應じて、此のバ音フツ音、ハ音の三様の音が、何れも現に使はれて居るミ言ふこゝは、音韻の歴史的研究所の立場から頗る興味多い事柄である。此處に伊波文學士のP音考の中からは是等の音の分布圖を轉載して見る。之に依つて吾人は、バ音、フツ音、ハ音の南島に於ける地理上の分布を知るのみならず、國語學史上の歴史的發達を知るこゝが出来来るのである。

	首	里	國	頭	八	重	山	宮	古	大	島
葉	フツ	フツ	パー	パー	パー	パー	パー	パー	フツ	フツ	フツ
墓	フツカ、ハカ	フツカ、ハカ	バカ	バカ	バカ	バカ	バカ	バカ	バカ	ハカ	ハカ

蝶	羽	鳥	春	柱	蛇	花	火	日	人	晝
ハベル	フワニ、バニ	ハタキ	フワル、ハル	ハイヤ	ハブ	ハナ	フ井ー	フ井ー	フ井ト、チユ	フ井ル
タベル	バニ	バタキ	バル	バヤ	バナ	バナ	ビー	ビ	チユ	ビル
バビル	バニ	フワタキ	フワル	バラ	バブ	バナ	ビー	ビ	ビト	ビル
バビツ	バニ	バタキ	フワル	バラ	バブ	バナ	ウマツ	ビー	ビト	ビル
バベラ	ハニ	ハタヘ	ハル	ハリヤ	ハブ	ハナ	ウマツ	ヒ	チユ	ヒル

足	筆	臍	帆	深さ	速さ
フ井シヤ	フデ	フス	フー	フカサ	フエーサ
ビシヤ	ブデ	ブス	ブー	ブカサ	ペーサ
パン	フデ	ブス	ブー	フカサ	パイサ
パギ	フデ	ブス	ブー	フカサ	バヤサ
ハギ	フデ	フス	フー	フカサ	フエーサ

一、其の他の子音について

ワ行音、現代の國語では、ワ行の井、ウ、エ、チはア行のイ、ウ、エ、オと同様に發音されて、特別の音の外全く古音は滅んで終つたけれども、琉球語に於いては猶ア行は判然と區別されて、Wi(井) Wu(ウ) Wo(エ) Wo(オ)の古音其の儘現在して居る。

ヤ行、ヤ行のイ、エの二音も國語に於ては、已に滅んで、ア行のイ、エと同様に發音されて居るけれども、琉球語に於いては依然としてyioの古音其の儘發音してゐる。此の外に音韻上説明を要するもの猶二三あるけれども、國語研究上それ程の價値もないから省略しておく。以上の音韻も教育の普及と交通の發達に伴ひ、段々國語の標準音に接近しつつあつて、六七十歳の老人でなくては聞かれない音も大分ある。琉球の文化向上の上からは悦ばしい現象である、けれども一部分の國語研究者の立場からは、洵に名殘惜しい事である。

五、琉球語の音韻轉訛について

琉球語の特種の音韻については既に述べた通りで、其の特種と思はれる音が却つて日本古代の音韻である。音韻の轉訛になるに至つて複雑である。勿論中には國語の音韻轉訛と同軌の法則に依つて轉訛したのもあるけれども、又琉球の自然環境に依つて獨特の轉訛律に律せられて轉訛した語も尠くはない。是等のものを類別して例示

して見るに次の通りである。

一、二重母音が長母音に轉ずるもの

- | | | | |
|---------|----------|---------|----------|
| 大工(デーク) | 内法(ネーハフ) | 才智(セーチ) | 買物(ケームン) |
| 堺(サケー) | 藍(イエー) | 使(チケー) | 灰(フェー) |
| 地震(ネー) | 模合(ムエー) | 害(デー) | 米(メー) |

一、短母音が長母音に轉ずる例は至つて多い。

- | | | | |
|--------|--------|---------|--------|
| 木(キー) | 手(テイー) | 毛(キー) | 豆(マーミ) |
| 臼(ウーシ) | 田(ター) | 湯(ユー) | 藻(ムー) |
| 荷(ニー) | 粉(クアー) | 藺(井ー) | 日(フイー) |
| 筒(ケー) | 主(ヌーシ) | ニジ(ヌーシ) | |

一、長母音から短母音にも稀には轉ずる。

- | | | |
|---------|--------|---------|
| 内證(ネース) | 角力(シマ) | 同士(ドウシ) |
|---------|--------|---------|

一、清音から濁音に轉じたもの。

- やかましい(ヤガマシイ) 鯨(グチラ) 鳥(ガラシ) 竹(ダキ)
- 莖(グチ) 蟹(ガニ) 軽い(ガツサン) 蠶(カイグ)
- 引出物(フィチヂブン) くるく(グルく) 配達(ハイダツ) 妨ぐ(サマダク)

一、濁音から清音に轉じたもの。

- 小瓶(クフィン) 体(カラタ) 潟原(カタバル) 石鹼(サフン)
- 海上(ケーショー) 鎔(イカタ) むづかしい(ムツカシイ) 便所(ビンシヨ)
- 小盤(クフン)

一、マ行音ミナ行音の轉換。

- 未(ナーダ) 宮平(ナーデーラ) 宮里(ナーザト) 濟む(シヌン)
- 讀む(ユメン) 噛む(カヌン) (マ行ノ動詞の終止形) 右(ニヂリ)
- (ミ連體形は皆然リ)

一、マ行音からバ行音への轉訛。

- 煙(キブシ) 重(ンブサン) 紙(カビ) 眠(ニブイ)
- 鞭(ブチ) 重石(ンブシ) 頭(ツムリ)(チブル)

一、拗音が直音に轉ずるもの(之は至つて多い)

- 正月(ソーグツチ) 大將(テーソー) 證文(スームン) 障子(ソージ)
- 醫者(イサ) 勳章(クンソー) 亭主(テイス) 主人(スジン)
- 朱(スー) 古酒(クース) 寫真(サシン) 役所(ヤクス)
- 百姓(ヒヤクソー) 修身(スーシン)

但是も日本古代の國語に於いては、平安朝以後に發達した拗音は未だ發達しないので、直音であつたのが、琉球語に於いて其の儘遺つて居る言ふこゝちが出来るであらう。

一、所謂那覇系統語(那覇の系統に屬する西海岸の地方に於いてはマ行ラ行の混同が著しい)

△ダ……………ラ

自動車 ジローシヤ) 裸(ハラカ) 戻る(ムルユン) 船頭(シンルー)
 堂(ロー) 香奠(コーリン) 段(ラン) 筆(フリ)
 御殿(ウルン) 子供(クルム) 宿(ヤール) 踊(ラルイ)
 △ラ……………ダ

蓮(デイン) 樂(ダク) 利(デイー) ティーラ(ティーダ)
 龍(ドウ) 欄干(ダンカン) 蠟(ドウ) 洋傘(ダンガサ)
 こむら(クンダ) 夕さり(ユサンデイ) 油(アング) 埒あく(ダチアチユン)
 らつきよう(ダツチョー) 隣所(デインス)
 但ラをダミ混同するのは首里にも多い。

一、カ行音がタ行音に轉ずるもの。
 客(チャク) 石川(イシチャイ) 菊(チク) 瀧(タチ)
 雪(ユチ) 月(ツイチ) 莖(グチ) 煙(チムリ)

薪(タチヂ) 吟味(ヂンミ) 肝(チム) 吹(フチュン)

着(ツイチュン) 今日(チユー) 【動詞にも多い】

一、リ音がイ音に轉訛する列。
 鳥(トウイ) いざり(イザイ) 梶取(カチトウイ) 森(ムイ)
 うはなり(ウハーナイ) たぐり(ナグイ) がり(カイ) 踊(ラウドウイ)
 百合(ユイ) 守(マムイ) 槍(ヤイ) ほつもり(フチムイ)
 一、添音こなるもの。
 必(カンナージ) 五合(グンゴ) 今朝(キツサ) 病(ヤンメー)
 鍛冶屋(カンチャイ) 九十(クンジユー) 弟(ウツトウ) 徳利(トウツクイ)
 藥罐(ヤツクワン)

一、略音こなる例。
 九年母(クニブ) 今年(クトウシ) 盗人(ヌスド) 飽(カナ) 涙(ナダ)
 一、撥音が長音に轉ずる例。

混布(クープ) たんご(ターグ) びんご(ビーグ) 團子(ダイグ)
 喉(ヌーディ)

一、英語で、動詞の語尾に^oを付けて名詞に轉ずる如く、琉球語にも動詞形容詞の語根に^o(ア)を付けて『何々する者』のやうな名詞を作る方法がある。又名詞にも最後の音を長音にして呼ぶこゝがある。

(イ) 名詞

太郎(タルー) 田舎人(井ナカー) 大和(ヤマトウー)

(ロ) 動詞

働く人(ハタラチャー) 食ふ人(クウチャー) 舞ふ人(モーヤー)

(ハ) 形容詞

高い人(タカー) 美人(チュラー) 深いもの(フカー) 黄いもの(チールー)

六、琉球語の品詞について

琉球語は一寸聞いただけでは異國語を思はせるが、國語に對する知識を以て十分に觀察する時にはそれ程の差異も認めないことは、前にも論じた通であるが。語法文法の上から觀察を綿密にして行く時には一層國語との密切な關係を見出すのである。是から琉球語研究上故らに必要と思ふ品詞だけを簡単に紹介する。

一、代名詞

名詞については特に論ずる必要もないから省略して、先づ代名詞のこゝを論じて見度い。代名詞の性質や分類に於いては國語の場合と何等異なるところは無いが、形の上では古代語其の儘のがあつたり、又轉訛したのがあつたりする。人代名詞に於ける階級も國語程甚しくはない。

代人名詞		第一人稱	第二人稱	第三人稱	疑問代名詞
あ、わん	わん	あ、わん	あ、わん	あ、わん	あ、わん
い、あが	い、あが	い、あが	い、あが	い、あが	い、あが
う、なんじゆ	う、なんじゆ	う、なんじゆ	う、なんじゆ	う、なんじゆ	う、なんじゆ
あり	あり	あり	あり	あり	あり
たー	たー	たー	たー	たー	たー
たる	たる	たる	たる	たる	たる

國語上二	著	ら	ち	ゆん	ゆる	れ	れ又り
國語下一	蹴	ら	り	ゆん	ゆる	れ	れ又り
國語上二	落	ら	り	ゆん	ゆる	れ	れ又り
國語下二	流	ら	り	ゆん	ゆる	れ	れ又り
國語さ變	爲	さ	し	すん	する	せ	せ又し
國語な變	死	な	に	ぬん	ぬる	ね	ね又に

△命令形がイ段になる時にはよを送る。

△連用形から時の助動詞たんに接続する時には、捉音便になるが、全く語尾が消ゆる場合が多い。

一、助動詞

琉球語は至つて助動詞が貧弱である。蓋、母語と分離する時に、未だそれまで發

達して居なかつたのか、それとも分離して以來生活が素朴なために必要でなくして消ゆる失せて終つたかの何れかであらう。けれども國語と系統を同じうして居ることは勿論である。推量の意味も、『筈』と言ふ名詞と外の助辭を以つて表はすだけであるが、極めて一小地方には、らめ、或はむが遺つて居る處がある。時を表はすにも過去のたりが遺つて居るだけであつて、未來を表はすには矢張『筈』を使つて居る。打消もすの活用形ぬ(ん)が遺つて居るだけである。敬語もすが遺つて居るに止つて居るが、使役の方は一寸面白い。山田孝雄氏の奈良朝文法史に依るに、奈良朝以前の使役相の助動詞は、しむ一つに限られて居て、す、さは平安朝期に行つて發生したやうであるが、琉球語に於ける使役相の助動詞はしむとすになつて居るすが平安朝以後の影響を受けたものか、それとも琉球に於いて独自の發達を遂げたものであらうか。受身の助動詞は古事記の萬葉にはゆ、らゆになつて表はれ、後代に、らるゝ變化して居るが、琉球語にはゆ、るの二つが使はれて居る。而して其

のゆゑに全く區別されない場合が多い。

一、助辭

助辭には、國語と全く趣を異にする特種のものもあるが、大体に於いては國語の場合と變る事はない。係結の助辭等も國語とは形の轉訛したものが使はれて居る。客語を表はすを琉球語に於いては全く省略されて居るが、古事記にもさうした表現法が使はれて居るから、省略される方が古形であつたらう。けれども中國地方の方言程に、助辭を省くことはない。

一、感動詞及副詞について。

感動詞は種類が少いだけで、國語の場合と大した差はない。副詞の種類も至つて少い。古事記も副詞の種類に乏しいばかりでなく、使用の回数も少いやうだから、琉球語に少いのも無理はない。よく琉球人の談話は圓滑な處がなく砂を嚙むやうだこの非難を受けるが、其の病源は副詞が尠いと言ふことも大きいものであらう。

一、接頭語接尾語

國語の接頭語及接尾語は、吾々の感情を微妙に表現する獨特の味を持つたものが多い。琉球語にも殆ど國語の接頭語、接尾語と同じ様なものがあつて、國語では已に死語となつた古事記萬葉集等の中でよく使はれたものが、まだ生語としてピン／＼して居るものさへある。次にかゝけて見る。

△接頭語

- | | | | |
|---------|--------|--------|--------|
| マツ白 | カチマースン | タツチーン | ケーターン |
| イーケーラスン | ウチ殺スン | ハン投ギーン | ウ殿 |
| グ保養 | ミ手 | ウラチラサ | クンタバユン |
| ウミワラビ | ハチ米 | フイタ使ひ | |

△接尾語

- | | | |
|----|-----|-------|
| 赤サ | 珍ラサ | ウヂラーサ |
|----|-----|-------|

太郎グッー(このグッーは頗る重寶なもの
で親愛にも輕侮にも使はれる)

樽ガニー

赤ミ

次良ミ

あにヒヤ

一、係結法

古事記時代に客語の下に附く助辭をが、省略せられる事が度々あつたやうに、琉球語に於いてもをの助辭を今に省略して客語を表はして居ることは前に一言しておいた。古語の語格を其の儘二千年余も保存して居ることは面白い事柄である。猶又琉球語に平安朝時代の係結が入り込んで來て今に残存されて居ると言ふことも亦興味多い事柄である。

琉球語に於いて、尋常の係に對して終止形の結びを用ひると言ふことは國語と異なるところはな。又オモロ等には已然形で結ぶとその係に相當するものもあつた様であるが、現代の琉球語ではぞに相當するさうと言ふ連体形で結ぶ係言葉が旺に使はれて居る。

例へば尋常の結で

わんねーなまぢやん(私は今來た)を

わんねーなまぢうぢやる

と言ふやうに已然形で結ぶ。此のやうに枕詞のやうな古語の修辭語も残つて居たら一層面白けれども惜し哉、それは見つからない。

七、其の他に就いて

琉球語と古代國語との關係、古代國語から琉球語へ反對に琉球語から古代國語へを觀察するに當つて必要な琉球語の音韻、琉球語の音韻轉訛、琉球語の品詞等に就いて概説だけは一通り上來叙述した通りである。是から進んで、琉球人の日常生活即ち衣服、食物、住居等に就いても叙述して見度いこともあるし、又彼等の精神上的生活即ち信仰であるとか、俗信であるとか、工藝美術であるとか、社會相であるとか神話、傳説、歌謠であるとか、言ふ方面も陳べて見たかつた。猶又彼等の年中行事や

出産、結婚、葬祭等の風俗習慣等に就いても立入つて考へて見度いこも多々ある。けれども是等のここの文化史的考察を進めて行くについては、又一冊の尨然たる大冊になる譯であつて、私の力の及ぶところでもなければ、又當初からの計畫でもなかつたけれども古事記と萬葉集中に現はれて來るここの語句、或は單純なる思想を透しての簡単な比較考察は進めて行つた積りである。然り簡単な比較考察である。文化史的に考察して、あゝも言つて見度い、斯うも考へて見度いと思つても、外に満足までは行かずとも是等に關する著述もあるし、又南島研究者に依つて續々發表せられるであらうと思つて筆を進めなかつた。本書の古事記の部と萬葉集の部に於いて幾分たりとも琉球の——古い琉球の匂だけは嗅いで貰へること、信ずる。古い琉球のこ斷るこころには大いに意味がある。現今の琉球の文化は、決して單純なものではない。最近琉球の建築研究のために琉球に遊んだ伊東忠太博士は、琉球の建築はあらゆる東洋の建築をコンデンスしたものだと言つて居る。建築のみならずあらゆる文藝、美術

音樂、演劇、舞踊等から現代琉球民族の日常の物質生活に至るまで、矢張り汎く東洋文化の影響を受けないものと言つてはないのである。是から述べる處のものは是等の外來の影響だと思ふこころを洗ひ去つて、古事記萬葉集を透して觀た古い單純な琉球に外ならないのである。

古事記の部

こゝに天神もろくの命以ちて、伊邪那岐命伊邪那美命二柱の神に『このたゞよへる國をつくり固めなせ』と詔ちて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故二柱の神、天浮橋に立たして、其の沼矛をさし下してかき給へば、しほこをろくにかきなして、引き上げたまふ時に、其の矛の末よりしたゝる鹽、つもりて島となる。是游能菴呂島なり。其の島に天降りまして、天の御柱を御立て、八尋殿を見立てたまひき。こゝに妹伊邪那美命に『汝が身は如何になれる』と問ひたまへば『吾が身は成り成りて、成り合はざる處一處在り』とまをしたまひき。伊邪那岐命詔りたまひつらく『我が身はなりなりて、成り餘れる處一處在り故我が身の成り餘れる處を、汝が身のなり合はざる處に刺し塞ぎて國土生成さむと思ふはいかに』とのりたまへば、伊邪那美命『然善けむ』とまほしたまひき。こゝに伊邪那岐命『然らば吾と汝とこの天之御柱を行廻り

逢ひて、みこのまぐはひせな』と詔りたまひき。かく言ひちぎりて、乃ち『汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ』と詔りたまひ、ちぎり竟へて廻ります時に、伊邪那美命先づ『あなにやしねをここを』とのりたまひ、後に伊邪那岐命『あなにやしねをこめを』とのりたまひき。各のりたまひ竟へて後に、其の妹に『をみな言先だちてふさはず』と告りたまひき。然れども久美度に興して、子水蛭子を生みたまひき。この子は葦船に入れて流し去てつ。次に淡島を生みたまひき。是も子の數に入らず。是まで宇宙創造の事を説いて來た神話は、是から愈々豊葦原の中國の國土創造及び山川草木等を掌る神々の出現を説かんとするのであるが、琉球開闢の神話が殆ど是に類する神話であると言ふことは頗る興味多いこと、言はねばならない。琉球開闢の神話は中山世鑑と中山世譜（何ちらも琉球の歴史）との兩書に書かれ、又琉球の萬葉集たるオモロにも歌はれて居る。世譜と世鑑とは少し趣を異にする所があるが、こゝには中山世鑑に依つて紹介すること、しよう。

昔天帝が阿摩美久と言ふ神を呼んで、『この下に神の住むべきところあれども、未だ島とは成らぬやうなり。爾行つて之を修理せよ』と命ぜられたので、阿摩美久詔のまに／＼下つて之を視察するに、東海の浪は西海に打越し、西海の浪は東海に打越して、まだ島にはなつて居ない。そこで一旦天に昇つて、土石草木を下して無數の島々を造つた。かくて數萬歳経つたがまだ人類は居なかつた。阿摩美久再び天に昇つて人の種を乞うた。天帝は『爾が知るやうに天に神多しと雖も下すべき神なし、さりとて黙視すべきにあらず』とて其の一男一女を降し給うた。此の二神はまだ男女の道知らなかつたが、往來の風に縁して女神は妊娠、三男二女を生んだ。長男は國君の初、二男は按司の初、三男は百姓の初、長女は君々の初、二女はノロノの初である。後に國土保護の神々が交々現れた。當時の民は穴居野處して果實を食ひ、禽獸の血を飲み、まだ火色を知らなかつた。阿摩美久は三たび天に昇つて、五穀の種子を乞ひ、麥粟米を久高島に蒔き、稻苗を知念

大川の後ミ玉城のウキミヅミに植ゑ、その始めて出来たものは天神地祇を祭つた。
 ●●●アモリはアマオリの約。琉球でも大島でもアモリミ言つて居る。琉球の脚本たる組踊銘苅子に『アモリしち我身や夢の間さやし』とある。其の外にも用例が多い。
 八尋殿の殿はトノで、昔は人の住宅に言つた。神のいます所、貴人の住宅をも言ふ琉球では鎮守の神が在す所として、草葺の堀立小屋を作り石の香爐をおいてある所があるが、其處をトゥンミ言つて居る。之れはトノの轉訛。猶貴人の家をウドゥン（御殿）。トゥンチ（殿内）ミ言つて居る。琉球の田舎（田舎でも全部ミ言ふ譯ではないが）に這入込んで行くミ、其の家の造り方がなく面白。時々薪等を積込んである破風造りの小屋を見るミがあるが、神殿の造り方から想像して太古の家の建方があんなものではなかつたらうか。一層興味ある問題は普通の住宅の造り方である。大國主命の宮殿が其の儘残つて居るミ言はれて居る出雲大社の造りが、眞四角であるが、琉球の元來の堀立小屋の住宅も其の屋根の形こそ異つて居れ、多く

は三間四方か二間半四方になつて居る。それ棟で狭い時には方形の建物を二つ並べて立てる。並べた時の大きくして上の方を大屋（ウツヤ）ミいひ、小さくして下屋の方をトングハ（殿小？）ミ言ふ。其の間取の仕方が出雲大社の間取そつくりである。先づ中央に眞柱を立て、田字形に仕切つて四間として、四面何ちらからも二間づつになつて居る。そして四間の建物なら、南面の向つて右手の間は客間兼佛間で左手の間が茶の間兼主婦の機織場、その後の間が臺所である。臺所につゞく客間の裏が、新夫婦の寢間に當る。こゝをクチャミ言つて居るが、太古クミドミ言ふのに當るかも知れない。内部の造作は貧富に依つて差のあるミは勿論であるが、其の間取が古代の形其の儘ミは珍しい。尤も現今では田舎に行かねばこんな建方は見られない。アイヌの住宅の建方は長方形であるさうだが、それと較べて考へさせられる處がある。神社の屋根のカツラギは古代住宅に於ける防風用のものが裝飾的に進化したものだミ言はれて居るが、琉球では矢張本來の防風用として遺存されて居る。

之をハ一イ（針）と言つて居るが、二尺位の木を、一間位の屋根なら前方後方から各々三本づゝさして、それに繩を強く締めて防風用として居るのである。是等は何れも日本の建築史上に貴い資料を齎して居るものと言はねばならない。

ヒロは尋で、物の長さを計るに用ゐる助数詞であるが、沖繩では物の長さは大抵ヒロを使つて居る。反物の長さもヒロで數へる。但家の長さは間で數へて居る。

ヒル子は日本書紀に『雖三已三歳脚猶不立』とあるから、手足が萎れた不具の兒であつたらう。このやうな不具の兒や發育が遅い兒を、琉球ではピールー又はピールーと言つて居る。ヒル子の解釋に對しては學者間に色々議論が有る様だが琉球語のピールーを考へたらすぐ解決される。

琉球語では今でもミギと言はないでニヂリと言つて居る。ミはニ、ギはヂ、リはイに轉音する。リがイに轉音する例は國語にもあるが琉球語には特に多い。又ガ行のギがダ行のヂに轉音するのも琉球語の一つの特徴である。

汝^ナと言ふ第二人称の代名詞はナ^ナと長音になつてまだ盛に使はれて居る。

我^アと言ふ第一人称の代名詞はア^アと言はずにワ^ワと長音に言はれて居る。我がものと言ふことをワームンと言ふ。奈良朝文法史の著者山田孝雄氏は、古事記には我（ア）多く、稍後れて編まれた萬葉集には我（ワ）が多く使はれて居るから、我（ワ）と

言ふ自稱代名詞を使つて居る琉球民族の南島移住は、少くともアがワに變つて後の時代ではないかと言つて居るが、此の一事を以て琉球民族の移住を決定するのは少々早まり過ぎはしないだらうか。

二はしらの神、山野^ヌによりて……………

ヌは後にも葛野^ヌとか度々出て来るからそれが古音であつたらう。現代の國語としてハノミ發音するのが、琉球では未だ古音の儘（ヌ）と發音されて居る。（ノ）とは全く發音しない。野國^{ヌクニ}、野原^{ヌバル}、野里^{ヌサト}と言ふ。序に言ふ、原もハルミ發音してハラミは言はない。九州地方にも田原坂^{タハラノ}等言ふ所がある。

大宜都比女神……………

ケ(宜)は御膳ミケの義で食物を言ふ。國語ではアサゲ、ユフゲミして残つて居るが、琉球でもユフキ(夕膳)と言つて居る地方がある。出産の折、命名式の御祝の供膳をウバギミ言ふのはウブゲの轉であらう。神前や佛前に供へる茶碗に盛つた御飯はウブクミ言つて居るが、之もウバケ(甘ケ)の轉ではなからうか。猶田舎へ行くに可なりの歳で死んだ人の葬式には會葬者に食膳を出す風習があるが、之にはステーキミ言つて居る。

此の子を生みますに因り、美蕃登ミホト灸ホトわて病みませり……………

ミホトのミは接頭語、ホトは女の陰部を言ふ。琉球語ではホー、又はホーミミ言ふホーミのミは接尾語。女陰の南島語は凡べてホカヒかで、而して古代日本語ホトに近い音ですが、徳之島の一地方ではホタ、ホータミ言ふ風に古語をつくりのがある。灸ホトわてのエは受身の助動詞ユの連用形で、ラユミ共に此の次の時代に行つてゐる。

らるミ變化して行くものであるが、琉球語ではゆミるミが遺つて居て、其の活用形も兩方共混同されて居る。

伊邪那美命が美蕃戸灸ホトわて失せ給ふたのが後代の火鎮祭の起源だと言はれ、祝詞にも火鎮祭ミ言ふのがある。琉球でも春秋二期行はれた。之をフイーマーチノウグツンミ言つた。各村々では假小屋を造つて焼いて、村でも各戸でも御祈が行はれた。道餐祭も春秋二回行はれたが今では何れも廢れて了つた。祝詞に表はれる御門祭の如きは、春秋ミ年末の三回、各戸では殆ミ缺がすこミはない。

多具理タケリになりませる神の名は金山毘古神、次に金山毘賣神、次に尿ウになりませる神の名は波邇夜須毘古神、次に波邇夜須毘賣神。

多具理は嘔吐のこミ。琉球語ではナグイミ言つて、嘔吐ミは言はずに人糞のこミを言つて居る。古事記にはクソミタグリミ判然ミ使別けられて居るが、琉球語では何ちらも糞のこミを言つて居る。けれどもナグイミ言つたら人糞だけに限られて居り

クスは汎く動物の糞までも言ふ。屎〇〇マルも今猶其の儘汎く使はれて居るが、愛知の方言にもクソマルと言ふ事があるさうである。又琉球語では下痢のこゝをクスフイリと言つて居るが、和名抄にも『クスヒリの病』と出て居るから、之も正しく古語である。ヒルミは『卵』『屎』『屁』と言つて、元來は体内の物を体外へ放つ意であるが琉球語では、轉じて金が利子をヒルミも使つて居る。けれども琉球語ではクソミカマルミカフイルミカ言ふ語は上流の人々には憚られて居る。又ナグイと言ふ語は老人の間にしか解せられて居ない。

こゝに其の妹伊邪那美命を相見まく欲して、黄泉國に追ひ往でましき。すなはち殿の隣戸より出で迎へます時に、伊邪那岐命語らひたまはく、『愛しき我が那邇妹命、吾汝ミ作れる國未だ作り竟へずあれば、還りまさね』と詔りたまひき。こゝに伊邪那美命ミをミしたまはく『悔しきかも、速く來まさずて。吾は黄泉戸喫しつ。然れミも愛しき我が那勢命、入り來ませるこゝかしこければ、還りなむを、且く黄泉神にあけつら

はむ。吾をな見給ひそ。』かく申して、其の殿内に還り入りませる間甚久しくて、待ちかね給ひき。

伊邪那岐命が伊邪那美命を戀うて、黄泉國まで訪づれて行かれた時に、女神は男神に對して『もつと早く來ませば可かつたに、もう黄泉戸喫をして終ひました』と嘆息される。黄泉戸喫の戸は竈の借字で、黄泉戸喫ミは黄泉國の竈で煮炊きした物を食べるこゝである。伊邪那美命が黄泉戸喫をして終つたから、最早時機を失して現國には歸られないと言ふのである。琉球でも之に類似の傳説が各地に傳へられて居る。私が子供の時によく次のやうな話を聞かされた。

或所に一人の婆さんが病氣になつて子や孫の眞心こめての看護の甲斐も空しくさう／＼最後の息を引取つた。涙の中に悲しい野邊の送も濟んで、翌日墓參して見るミ墓の中で棺を叩く音がする。一同のもの且つは驚き、且つは怪んで墓を開けて見るミ彼の婆さんが目もきよろ／＼して棺の中から這ひ出して居るではない

か。皆が嬉し涙にくれつゝ、家に伴れて歸る。彼は後生（黄泉國）の有様を語つた。後生に行つて暫く經つゝ大勢の鬼見たやうな者がたかつて來てアカンチャーメー（赤土飯）を食べよこす、める。食べ度くないと言ふと頻りに嚇したり賺かしたりして遂に力づくにも食べさせようとする。自分は愈々口をきつゝ結んで嚴然として應じなかつた。其の中には彼等も我を折つて、王様らしい者が出て來て、お前は之を食べなければ此處に置くことは出來ないからすぐ歸つて行けと言つた其の聲が終るが早いか私の目には明るい光が見えて來た。其の婆さんは、後生に行つてアカンチャーメーさへ食はなければ又元の世の中に歸れるんだと、何日も得意顔に話して居たさうである。

死に對する思想は人間の思想の中でも可なり大きい位置を占めるものである。古事記の神話と言ひ、琉球の此の傳説と言ひ、勿論思想としては原始的であり、幼稚なものであらう。けれども佛敎渡來以前に於ける彼等大和民族の觀念を支配して居

た單純な思想であつたことは今更論するまでもない。かく兩者の思想が、斯のやうな點に於いて一致點を見出すのも面白い。

又殿の藤戸と言ふのは古代墳墓の構造を説明するこゝが出来る。古代墳墓の外部から玄室に至る美道に立てられた石が此の藤戸である。古代墳墓は玄室を大きい石を以つて圍んである。而して古代墳墓は極めて大きい石材を使つたと言ふことは斯道の大家の説くところであるが、琉球に於いては古墳のみがそれを使つてあるのみならず、今日の墳墓も大なる石材を使用する。其の大石材の運搬法が、鳥居博士が語られる太古の運搬法と琉球のそれと全く同一である。——『日本趣味十種』中の挿繪参照——先づ岩石から切り採つた大石材を丸太の上に載せ、石材の上には音頭取が立つて太鼓を叩いて氣合をかける。大勢の男女が綱で前から引く。大石材は丸太の上をコロコロと轉つて行く。太古の大和民族を古墳の中に起して見せ度い光景である。一火燭して入り見ます時に、宇士多加禮……………

タカルは琉球語では節タカラ、ンジタカラ等多く寄り集る意にも使はれて居るが、智慧タカラ等の如く物の豊富な意味にも轉用されて居る。ウヂは琉球でもウヂと言つて居る。

是を拾ひ食む間に逃げて行でますを……

拾ひは拾ひの古語。沖繩では一般にヒリユンと言つて居る。

ハムは食ふこと、沖繩では今でも食むと言ふ地方がある。カムから轉じたのであらう。カムも言つて居る。

猶追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃子を三箇取りて、待ち撃ち……

比良坂は古事記傳に、『平易なる意なり』とある。琉球語ではヒラは所謂サカを言ふ元來は平塚であつたかも知れない。

桃の實を投げて黄泉醜女を待ち撃つたと言ふ思想も、沖繩のカーウリー（赤坊の名付けをする儀式）に桃の枝の弓を射るの思合せられてなかく面白い。一体桃の

木が邪氣を拂ふと言ふ事は、左傳にも見えて居て支那の思想であるやうだが、私は沖繩のカーウリーに桃の枝の弓を射る（桑の枝の弓を射る地方もある）事を、支那から直接に這入つて來た思想とは説明し度くない。

猶又婚禮の場合に、花婿に出す煎餅に桃の枝の箸をおく事も、これと關聯してなかく興味有る問題である。

汝吾を助けしが……

ゴトは如くの語幹のゴトを、かう言ふ風に用ひることは古い語であつて九州地方にはさう言ふ所が多い、現に琉球語でも、山のゴト高い、砂糖のゴト甘い等と言ふ風に用ひて居る。

汝しかく給はば、吾はや一日に千五百の産屋立てむ。

日本の古代にあつては、出産に血を見る穢を忌んで、別に産小屋を建てる風習があつた。鶉葺草葺不合命の御出産の折の神話等に徴しても明瞭で、今でも皇室の御慶

事の時には御産殿を新に御建てになる。他府縣でも地方に依つては、産婦のために特別の産小屋を建てる所があるらしい。琉球でも草葺の家を建てる時に、家に妊婦でもあれば、イリチャ（イラカの轉で家の棟に當る所）を葺かずに、五六ヶ月でも放つて置いて、安産後に葺く地方があるが、矢張この産屋を建てたと言ふ、古代思想の遺物ではあるまいか。月經時に別小屋を建てると言ふ事は遺つて居ないが、月經のここをケガレミカサハリミカ言つて忌んで居ることは今でも確で、月經時には神棚の前に出ることを憚り、物詣でに行くことを絶対に慎まれて居る。

故吾は御身の禊せな……………

●●●●●
ハラヒをした思想は、遠く神代に其の淵源を持つて居て、清淨潔白を好む大和民族の國民性の重大な要素となつて居る。後代朝廷に於ても、民間に於ても嚴肅に行はれた六月十二月の禊は此の思想の流であるが、琉球にはこの定例の禊は遺されて居ない。舊四月に行はれるアブシバレ（哇禊？）と言ふものが、恰度琉球では舊曆

四月の一日が衣更にもなつて居るから、古代の禊の變形かとも思はれる。併しながら此のアブシバレ、は舊琉球王廳に於ける支那式の勸農的儀式にもなつて居たから單に言葉の上ばかりから斷定するのは少々早いかとも思はれる。物詣の時に泉水で手や口をすすいだり、マース（眞鹽並食鹽）で身を清めたりする事は、殊に老人等は嚴肅に行つて居る。

死の穢を忌む風習は今に失はれて居ない。葬式の歸りに首里那覇の婦人は食鹽で禊つてから自分の家には這入る。けれども田舎に行くに、會葬者は男でも女でも、歸途の泉か川の畔に行つて身を清め、三本宛の薄の先端を結合させたものを兩方から捧げさせて、其の間を潜つて歸る風習を見る。是は正しく古代の禊の遺形たるものを見るこゝが出来よう。

禊せなのナはは希望の意の助辭で、古事記三萬葉集には引ツ切りなしに表はれて來る語であるが、琉球では、行かナ、作らナ、勝たナ、起きらナなご琉歌にも普

通の對話にも絶えず使用される語である。

次に投げ棄つる御裳になりませる神の名は……

裳は腰から下に巻く上の禪ハジマで、平安朝になつて女官の服装に用ひた裳は其の進化であらう。沖繩ではノロ言ふ神を祀る女の正装に、邊地に行つたら今もなほ見るこゝが出来る。禪のやうに襠はないけれども、中古時代のそのやうに襠はつけられて居る。關根文學博士は、古代の裳は布を腰から下にくるくゝ巻いて居たに過ぎないと言つて居られるが、恐らくは琉球民族が分離する頃には現代琉球のノロが着て居るやうな形に進んで居たのであらう。但中古のそのやうに、染色もなければ模様もなく、白木綿の純白のものである。蓋大和民族古代の裳も均しく麻織の純白無垢なものであつたらう。琉球では今日單に裳と言はずにかカムと言つて居るが、これはカカモ（カカゲモ）の轉訛で、禪ハジマと同じく説明が出来よう。田舎道でドヂン（胴衣）、カカムで首には曲玉をかけて、正装したノロに出合つた時には、ゆくりな

く二千年前の吾等の祖先に親しく邂逅した氣に打たれる。

田舎に行くに、太古から平安朝にかけて、上裳として着られる筈であつたカカムが腰巻に變化して、丁度男の越中禪のやうに、但其の方向だけは男の禪と反對に前の方から後の腰の邊で挟まれて居るさうである。日本書紀の神代の巻に、『天照大神が御弟須盡鳴尊に逢ひ給はんこし給ふ時に、男装して裳を禪ハジマとされた』と見えて居るが、蓋現今の琉球婦人のカカムの着方をなさつたのであらう。太古人は必要に應じてこのやうな服装をしたのであらうが、現今の琉球婦人は男勝りに働かねばならないのこゝ、一方に於ては儒教に依る貞操觀念等も手傳つて現今の様な形に變つて行つたのであらう。儒教思想が深く根ざして來た首里と那覇の方では、もつと強く防ぐべく、カカムは捨て、ハカマ（ハキ裳の轉か）と言ふ古代男子の用ひたハカマのやうに襠のついたものを用ひるやうになつて居る。

次に投げ棄つる御裳ハジマになりませる……

ミケシはミソミ同じく、裳が下から着るに對して、ミケシは胴の上に着るものである。琉球ではドウチンミ言ふ。胴衣ドウギエの轉であらう。ミケシミ言ふ語はンテムシミ轉じて残つては居るが、其の意味は全く異つて、首里の上流婦人がハカマのこみをしか呼んで居る。

上瀬は瀬速し、下瀬は瀬弱しミ詔りごちたまひて……………

ノルは名告るのノルミ同じく告げるの意。上に告げるにも下に告げるにも言ふ。琉球では上に告げる意味ばかりで、神に仕へてノリゴトをする女をノロミ言つて居る琉球の村々にはノロミ言ふ神官が居て、四五十年前までは聞得大君ミ言ふ琉球政廳の神祇職に依つて統一せられ、政廳から配置された地方官地頭職ミ相對峙して、琉球政廳祭政一致の政治を補佐して居た。是本土上古の祭政一致の面影を彷彿たらしめるものではないか。彼等が神を祀る時の服装は宛然太古を偲ぼしめるものがある勝連半島に於けるノロの正装は白のドウチンにカカムをはき、首には曲玉をかけ、

頭には木の枝を巻く。其のささける祝詞は實に雄大である。

吾アレは子シ生ム生ミみて、生ミのはてに三はしらの貴ウツの子得ミたり……………

ウヅは珍・貴・美・重の字を宛てるミ解されて居るが、賢いウツの意ではないだらうか琉球語で賢い子供のこみ又は奇麗な子供のこみをウヅラーシーワラビミ言ふ。ラーシーはラシイで接尾語である。又こざかしい子にも言ふは轉義であらう。

其の御頸珠の玉の緒、もゆらに取りゆらかして……………

御頸珠は玉を緒に貫いて珠数のやうにした頸飾である。先に言つたノロの正装の場合には常に目撃する姿である。私が幼い折にはよく女の子が、ズズダマ草の實を糸に貫いて環ウツさなし、頸にかけて遊んで居るのを見るのであつた。蓋太古風俗の遺影であつたらう。

ここを以てあらぶる神のおみなひ、狭蠅なす皆わき、萬づの物の妖ウツこシくにおこり

アラブルは琉球語では名詞形として盛に使はれて居る。木精の祟を木のアラビ、山の祟を山のアラビと言ふ。之等のものが教養のない婦人連の間には一つの社會力をなして居る。

オトナヒも音沙汰もないと言ふ時にウトナヒもきからん其の儘使はれて居る。オトツレと言ふ人もあるが、それは極めて一小部分である。

三段に打折りて……

三キダは三分すること、『段階』『刻む』も同語源。琉球語キザイ（階段）もこれからおこる。三刻みにすること言ふことを三キザイに切ると言つてゐる。

天照大御神忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめ給ふ時に……

ミソは先にも言つた語で、昔のミケシのこと、後代は一般に衣のことを言ふ。琉球の士流以上では今猶ンス（ミソの轉）と言つて居る。琉歌等にも盛に使はれて居る言葉である。

其の大嘗オホニハきこしめす殿に尿まりちらしき

オホニハはオホニヒアへ（大新饗）の約言、新穀を收穫した時、其の豊穰を祖神に

感謝するため、先づ初穂を神祇に供へ、自らも之を食ふ神事で、後代の大嘗祭及新嘗祭は此の神事の異風である。農業國であり、祖先崇拜の國たる我が國では當然の祭事で、琉球に於ても嚴肅に行はれたものである。琉球では猶一步進んでたゞ新穀の折ばかりでなく、麥豆の收穫の折にも行はれる。

イ 舊二月 麥の初穂を供へる

ロ 舊五月 稻の初穂を供へる

ハ 舊六月 新穀及神酒を供へる

一定の日はなく、其の月の吉辰を卜して舉行されたものである。四五十年前までは國を擧げての祭典で、上は琉球王から、下は百姓に至るまで業を休んで極めて嚴肅なものであつた。殊に婦人なごは神祟を慮つて、十四五里の遠隔の地をも厭はない

で宗家や土産神に詣でたものであつた。而して段々世の中が世智辛くなるに従つて此の美風が段々廢頽しつゝ、あるこゝは慨歎の至りである。農家ではまだくゝ田畑の初物や初果物は、先づ靈前に供へない限り自分等が初に食ふこゝをしない。後代の『田の面の節句』は琉球では舊六月二十五日に行ふこゝになつて居るが、その時の贈答米をシチュマミ言つて居るが、之は節米の轉訛であらう。

天照大御神怪しおもほして、天石屋戸を細めに開きて、内より告りたまへるは『吾が隠り坐すに因りて、天原自ら聞く、葦原の中國も皆聞からむおもふを何こかも天字受賣はアソビし、亦八百萬神もろくゝ笑ふぞこのりたまひき。

アソビは歌舞音樂のこゝで琉歌にも盛に使はれて居る。田舎に行くに村芝居のこゝもアソビと言ひ、出産や婚禮の場合のウタゲをもアソビと言つて居る。

モロくゝは皆こか一同言ふ意。琉球では略してムルミ言ひ都鄙何れも使つて居るが、地方に依つてはブルミ言ふ所もある。

アソビ
ムルミ

即ち布刀玉命尻久米繩を其の御後方にひきわたして……………

シリクメナハは後世のシメナハである。即ち尻籠繩の義で、藁の尻を切捨てず、端を其の儘にのこしておく繩、但後世のシメナハは裝飾的にわざく藁の尻を長く垂らしておく。シメは占の義で或地域を我が領として占有する時に、其の周圍にこの繩を張つたのが名の起源である。これを神前に引き渡す時は、禍や汚穢なごの侵入を防ぐ呪言なるを考へて居たのである。新年に之を門に張るのも勿論その遺物である。琉球でも民間では神事にも使はれて居る。其の外清浄なるべき場合に引渡して居る。産室の周圍にも引き渡して居る。それをヒザインナ（左御繩の意か）と言つて普通の繩を反對に左なひにする。

シリへは前に對する尻方（後方）の義。沖縄では部落の後方のこゝをシリと言ひ牛馬の後足のこゝもシリと言つて居る。又シリへ、ウシロの事をクシミ言つて居るが、琉球に在る久志村等言ふ地名や越の國等と思ひ合せて考ふべき語ではなから

私は曾つて目撃した那覇を去る二十里餘、北國頭の山の奥の民家に、さうした姿を見出すことが出来る。山の奥のサン／＼として囁く小川の岸邊に建てられた二三軒のさ、やかな民家、飲料水も使用水もその小川に汲み、米も小川にぎぎ、野菜もそこに洗ふ、食器も其處まで運んで行く。須佐之男命が見出された箸は、さうして流れ／＼て来たのでは無かつたらうか。猶此の想像に一分の重みを加へしめるのは琉球のカーミ言ふ語である。カーミ言ふのは河の轉で、琉球では井の事を言ふのである。想ふに太古にあつては、井を掘らずに凡べて河水で用を濟して居たであらう。後に泉水を求め、井を穿つて使用するやうになつても、カーミ言ふ名稱で今に通して来たに違ない。而して河原ミ言ふ語を其の儘河には別にカーラ（河原）ミ言ふ名稱を與へるやうになつたであらう。

いましてち八摺折の酒を醸みまた垣を造り……

酒をカミミは酒をかます事。言語學者に依つて説明される、太古酒はかんで造られ

たから酒を造る事をカモスミ言ふミ言ふ事は、琉球に於ては今に神事の際の神酒造りに名残が止められて居る。舊六月の綱曳の時や新穀を供する舊六月のお祭の折には今でも田舎の村々字々で神酒を造つて居る。先づ米をくだいて御飯に炊き夫れを臼にかけてひく、ひかれた物を桶にうつし水を加へ麴を入れて一晝夜位放置しておくミ、酸酵作用に依つて美味な神酒が出来る譯である。が麴を加へる時に一村中から選ばれた美しい素行の治つた處女（所に依つてはノロに屬する神女）が七日間齋戒して、口で嚙んで三度桶に吐入れる事になつて居る。是は正しく上古の米を嚙んで酒を造つたミ言ふ遺風であつて、麴が発見されない太古にあつては、唾液を以て酸酵作用を起させるために處女なごを集めて全部口で嚙まして居たのであらう。今でも信州の山奥には、山葡萄で酒を醸す時、その果を口で嚙んで唾液を交ぜねば良酒は得られないミする地方があるさうである。併して造られた神酒をミキ又はウンサク（甘酒）ミ言つて神に供し、人民に頒つたのである。私が度々實見したウンサク造り

● オモは元來乳を與へて養育するものだ。諸學者は言つて居るが、沖繩ではオモ其の儘或はアモ、アムに單に母のこを言つて居る地方がある。琉球の標準語としてはアンマーと言つて居るがアモの轉訛した語であらう。又婚禮の場合の花嫁を迎へに行くサダリアムシタリ(ミサデーバー)のアムも正しくアモであらう。此のアムシタリのアムシから轉訛して那覇人の祖母を呼ぶハムシーも出來たのであらう。猶バーバーがババーの轉訛であることは殊更に言ふまでもない。首里の士流ではアンマーと言はずにアヤーと言つて居るが、之はオヤの轉訛であらう。オヤと言ふ語は母親一人を呼んだ語で、決して後代の如く父親も併せてオヤと言ふことはなかつたらしい。オヤと言ふ語が母性中心時代の古代の社會の面影を偲ばしめる如く、琉球語のアヤーと言ふ語も古代の母性中心時代の社會組織を説明して餘ある語であらう。母性中心の社會に於いて、女權の低くはなかつたと言ふことは、思想家のよく口にすることであるが、古代琉球に於いても、女權が相當に高かつたと言ふことは否

定すべからざる事實である。琉球で男性と女性とを併せ呼ぶ場合に、ナイナグ井キガ(女男)、ミームンチームン(雌雄)、ミート(婦夫)等、屹度男性よりも女性を先にして呼ぶやうになつて居るが、之等も女性中心時代の社會の状態を雄辯に語る者であらう。又琉球では親鳥のこをアヒヤードウイといひ、麴のもこになるものを麴のアヒヤーと言つて居る。オヤ、アヤー、アヒヤーに次第に轉訛して行つたのではなからうか。人類から生物、無生物へと段々オヤの語が轉訛して行つて居るのも面白い。琉球人がものに吃驚した場合には、如何なる大人でもアンマーヨーに大聲を發して先づ母親を呼び、決して父親を呼ぶこをしない。これも太古の子供が、専ら母性の手一つで養育せられて居たこを語るに足りる資料であらう。此の點に立脚して考を進めて行く時、私はオモを乳母の意であるとか、乳を與へて養育する凡べてのものを呼ぶ語であるとか説明する大家の説には無條件に賛成する譯には行かない。其の語源も決して阿母(アモ)の字音から來たのではあるまい。琉球の赤ン坊は母

の乳房にすがつ居て、盛にアンマーアンマーを連呼する。其の最初に發した自然の第一聲が直ちに母を呼ぶアモと言ふ語になつたのではなからうか、殊にアモは母音でもあるから發し易かつたのであらう。乳母のここには特にチーアム（チチアモ）ミカアンメーミカ言つて居る。

茲に抄出した、蛤貝比賣が水をオモの乳汁ミとして塗つたから、焼かれて死んで終つて居る筈の大國主命が、直ちに甦生して復た元の麗しい男の姿になつたと言ふ如きは、琉球の田舎へ行つて、夏時等に子供のオデキに乳汁を塗つてやつて居る母親をしばく見るのミ思合せて、頗る興味多い事柄である。

八千矛の神の命は、八島國妻まぎかねて……………

●●● マグは元來は求める意味で、其の意味で古事記の中には大分現はれて居る。妻まぎは妻ミすべき女を探し求める意。先島の池間島の船頭唄に『やさミからトジ(妻)まぎミ唄つて居るのを聞く。先に出た美戸のマグハヒのマグミ言ふ語も同系統の語

で、男女の交接をも古くはマグミ言つて居る。交接のここを大島郡の徳之島ではマクミ言つて居り、宮古島ではマグムミもマクミも言つて居る。沖縄師範學校を卒業して初めて宮古の小學校に赴任した若い先生が、兒童に『君はマクだ』と言つて、全級の生徒をくすくす笑はせたと言ふ珍話がある。沖縄本島内では、小利功だミか茶目ミか言ふ意味にマクミ言つて居るので、先生が其の意味に言つたのを、兒童はさうは受取らなかつたのである。又沖縄本島内で、女陰のここをマクミ言ひ、女たらしのここをマクミ言ふ地方がある。小利功の者をマクミ言ふ語源も大体想像がつく。

くはし女をありミ聞かして、さよばひにあり立たし……………

●●● サヨバヒのサは接頭語である。ヨバヒは夜這ひして妻を求める意であらう。琉球では正妻をトウジ(刀自)と言ひ、妾をユーベーと言ひ、所謂夜這ひをサグル、婚禮をニービチ(根引)と言ふ。(普通には身代金を出して藝娼妓の足を洗はせること

を根引といふ。又妻帯することを琉球では『トウジ(刀自)カメユン』といふ。カ
 メーユンは探すと言ふ意味である。之等のサグル、トウメーユン、ユーペーと言
 ふ語は何れも古琉球に於ける結婚風俗を語る語で、八千矛の神が妻まぎに八島の國
 國を夜這ひされた大和民族古代の掠奪結婚の風俗を想像するに難くはない。中城灣
 頭の久高島には現に面白い結婚風俗が遺つて居る。先づ結婚式が濟むと花嫁は何處
 ともなく姿を隠して終ふ。花婿は女の姿を尋ねて島の隅から隅へ巡る、全で鬼ご
 つこである。時には一週間に亘つても探し出せない折もある。若し一日位で尋ね出
 されたら女は島の人々から品行を疑はれて面目を臺なしにする。是も掠奪結婚の餘
 映と見るこゝが出来よう。又勝連半島の島々では、結婚式の花嫁の行列に續松を翳
 して唄を歌つた。續松を翳すのは夜這ひして妻を探した習俗を偲ぶこゝが出来る。
 首里那覇に於いては花嫁の行列に、男女の兩家から各一對づゝの提灯を連ねる。是
 は正しく勝連半島の島々の續松からの進化であらう。南九州にも提灯の行列はある

さうだから、續松、提灯の行列は大和民族の結婚風俗にはなくてはならないもので
 あつたらう。琉球の結婚も儒教の餘澤を受けて、他府縣同様極めて嚴肅に舉行され
 るやうになつた。久高島の珍俗も段々影をひそめるであらうし、提灯の行列も段々
 廢れて行くやうになつて來た。

さぬつ鳥雉はこよむ……………

トヨムは響く意である。沖縄では評判のよきこと、さわがれる意に使つて居る。世
 間トウヨマレル清ら女等言ふ。

又其のおほきさき須勢理毘賣命甚くウハナリねたみし給ひき。

ウハナリは妬む意。琉球語では母の膝の上なる兄を弟がウハーナイすると言ふ。一
 人の男が二人の妻を持つ時に、後妻をウハナリ、前妻をコハナリと言ふのも妬む意
 味から言ふのであらう。琉球語でも矢張りウハーナイ、クハーナイと言つて居る。

若草の妻持たせらめ……………

ラメは推量の助動詞であるが、古事記にも多くは出て来ない。一体助動詞は品詞の中でも形が變化し易いためであらうか、古代の助動詞が其の儘の形で、琉球に遺つて居るのは容易に發見されない。このラメも高離ミ言ふ小さい島でやつミ聞いたばかりである。けれど彼の島では子供に至るまで盛に使つて居る。

弟機織女オトメバタの……

オトはオトメ、オトヒメ、オト子等と同じ様に親愛の意があるミ言はれて居る。現代語では男の兄弟の年下の者を言つて居るが、古くは男女の區別がなく何れにも親しむ呼んだのである。琉球でも何れにもウツトウ(オト)と言つて居る。琉球では兄弟を區別する語もなく、何ちらにもシージャミ言つて居る。兄のこを井キガシージャ、姉のこを井ナグシージャミ言ふ。但セビトの轉訛であらうか。琉球の女の名前にウト、ウタ等ミ言ふのが澤山ある。私はこのウトミ言ふ名を聞く度に、彼の優しい弟機織女の姿を遠く認ばずには居られない。

水戸神の孫、櫛八玉神をカシハデミして……

カシハデミは膳部をつかさどる人を言ふ。上代では食物を木の葉に盛つて食べたのであつた。其の木の葉は何れの木の葉でも、之をカシハミ呼んだ。琉球でも田舎に行くミ饗宴の時でも、子供には芭蕉の葉か、ユーナの葉に盛つて出す處がある。之等の木の葉を凡てカーサ(カシハ)の轉ミ言ひ、之で包んだ物をカーサヂチンミ言つて居る。現に神に供へる赤飯もこのカーサミに盛る例になつて居る。又七月の御盆の時に供物をカーサミを敷いた籠になほして門まで送るミになつて居るが、之も食物を木の葉に盛つた上代人の生活を偲ぶミすがミなるであらう。純朴な琉球民族は後代に至つて傳はつて來た佛教的年行事の盆祭にさへ、祖先生活の面影を偲ぶ風習を取入れるミを忘れなかつたのである。序に言ふ、琉球では御飯茶碗のこをマカヒミ言つて居る。マカヒは眞貝で、眞は接頭語であらう。勿論現今では立派な瀬戸物であるけれども、この名詞は古代琉球民族の食器の面影を雄辯に語つては居

ないだらうか。小皿のこどもケーウチと言つて居るが此のケーも貝の義ではなからうか。

故問はせ賜ふ時に答へまをさく、『あれは國神名は猿田毘古神なり。出で居る所以は天神の御子天降り坐すこ聞きつる故に、御前へ仕へまつらむとして、参迎へさもらふぞ』こまをしたまひき。

猿田毘古神は、『言葉の泉』には『サダノオホカミ（猿田大神）サダヒコノカミ（猿田彦神）、天孫降臨の時御先導をなしたる神』とある。

先導をなしたと言ふ意味が、サダヒコノカミのサダから説明されると言ふことは、曾つて伊波文學士が琉球語の例を擧げて論ぜられた通りである。此のサダと言ふ語は、琉球語の標準語としては殆ど死語となつて居て、只名詞の中に（サダリアムシタリ）又は（ミサデーパーパー）と言ふ言葉の中に辛うじて命脈を保たれて居るに過ぎない。けれども首里から一里位の田舎にまだサダユンと言ふ動詞として使はれ

八重山浮山
サダキ

先に

八六
サダ
サダ

て居り、宮古八重山大島あたりまでもまだ生語として盛んに使はれて居るのである是を琉球の文献にたづねて見るに、三百六七十一年前の琉球の古歌の中には

らくぶつの御帯 よわらおし廻ち

首里ぎやなしめでい、でわねさだら

とあり、百年ほぎ前に出来た組踊『花賣の縁』に出て来る猿まはしの臺詞には

『是や久志邊野古猿引さやゆる。大宣味番所から此の猿の踊お望のあきて、さうて行きゆん。たうくさだれく』

とある。此の二つのサダは、何れも琉球語のサダユンと言ふ動詞であつて、サダラは未然形、サダレは命令形である。而して意味は先になるさか、先導をするさか魁になるさか言ふことになる。

又日本全国にサダと言ふ名のつく岬が、二三あつて、このサダはサキ又はミサキと言ふ意味があると言ふことを、アイヌ語の例を擧げて論じた人があるさうだが、

之も縁遠いアイヌ語を引くまでもなく、更にもつて手近い琉球語のサダユンを持つて行けば一層明瞭になる譯である。

青山に 日が隠らば

ぬばたまの 夜は出でなむ

朝日の 咲き榮わ來て

たくづぬの 白きただむき

沫雪の わかやる胸を

そだたき たたきまながり

またま手 たま手さしまき

ソダタキのソを契沖も今の大抵の學者も皆動詞に附く接頭語で、ソダタキは單に叩く意である、と言つて居るが、私は副詞であるとの宣長の説を取りたい。宣長の古事記傳には、ソダタキを俗にソト叩く謂なりといひ、凡べて物事を緩く和かにす

ソルト

るをソルトとも、ソツノトとも、ソロリトとも言ふは皆このソであるとい説いて居る。琉球語でひそかにミカ、こつそりミカ言ふ場合にスルイトミ言ふのは古事記傳のソロリトである。

故ここに神産巢日御祖命に申し上げしかば、『こは實に我が子なり。子の中に、我が手俣よりクキシ子なり。故汝葦原色男命ミ兄弟ミなりて、其の國作り堅めよ』とのり給ひ

き故それより大穴牟遲ミ少名毘古那ミ二柱の神相並ばして此の國作り堅めたまひき。

クキシのククは漏くで潜る意、琉球語で漏る、潜るの意にフキユンミ言ふ動詞があるが、此のククの轉訛であらうか。フキユンミして自動詞にも使ふし、フカスンミ言つて他動詞にも使つて居る。粉を漏らすことを『クーフカスン』ミ言ふ。クキがフキになるは少く縁遠い轉訛のやうにもあるが、琉球では含むのこを反對にククムミ言つてフミクミ互に相通する場合がある。花のフツモリを花のククムイミ言ふ例もある。

又琉球では非常に腕白ですばしこい持余した子供を『手の俣からふきゆるわらび』
と言ふ。以つて少名毘古那神の性格を想像するこゝが出来る。

乃ち船毎に己が頭を垂れて其の酒を飲みき。こゝに飲み酔ひて留り伏し寝たり。すな
はち速須佐之命其の御佩かせる十拳劍を抜きて、其の蛇を切り散り給へば、肥の河血
になりて流れき。

散るはハフルミ訓み、すたくくに寸断するこゝである。琉球語で『切りハフユン』
と言ふ。米なごまきちらすこゝをマチハフユンと言つて居る。

故火照命は海佐知毘古として、鱈の廣物、鱈の狭物を取りたまひ、火遠理命は山佐
知毘古として、毛の麤物毛の柔物を取りたまひき。ここに火遠理命其の兄火照命に
『各に佐知を易へて用ひてむ』と言ひて、三度乞はししかごも許さざりき。然れご
も遂にわづかに得易へたまひき。かれ火遠理命海佐知を持ちて魚釣らすに、かつて
一つも得たまはず、亦其の鉤をさへに海に失ひたまひき。ここに其の兄火照命、其

の鉤を乞ひて『山佐知も己が佐知佐知、海佐知も各が佐知佐知、今はおのもく佐
知返さむ』と言ふ時に、其の弟火遠理命のりたまはく『汝の鉤は魚釣りしに一つも
得ずて、遂に海に失ひてき』このりたまへごも、其の兄強ちに乞ひはたりき。故其
の弟御佩の十拳劍を破りて、五百鉤を作りて償ひたまへごも取らず。亦一千鉤を作
りて償ひたまへごも受けずて、『猶其の本の鉤を得む』とぞ言ひける。こゝに其の
弟海邊に泣き患ひひて居ます時に、鹽椎神來て問ひけらく、『いかにぞ虚空津日高
の泣き患ひたまふ故は』と問へば、答へたまはく、『我兄ミ鉤を易へて、其の鉤を
失ひてき。かくて其の鉤を乞ふ故に、あまたの鉤を償ひしかごも受けずて、猶其の
本の鉤を得むと言ふなり、故泣き患ふ』このりたまひき。故鹽椎神『我汝が命の爲
に善き議せむ』と言ひて、即ち無間勝間の小船を造りて、其の船に載せまつりて、
教へけらく『我其の船を押流さば、やや暫し往てませ。うまし道あらむ。乃ち其の
道に乗りて往ましなば、いろこのご宮、それ綿津見神の宮なり。其の神の御門に

到りましなば、傍の井の上に湯津香木有らむ。故其の木のの上に坐しまさば、其の海神の女見て、はからむものぞ』と教へまつりき。故教のまに／＼少し行でましけるに、備に其の言の如くなりかば、即ち其の香木に登りて坐しましき。ここに海神の女豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば麗しき壯夫有り、いとあやしとおもひき。故火遠理命其婢を見たまひて『水を得しめよ』と乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れてたてまつりき。ここに水をば飲みたまはずして、御頸のたまを解かして口に含みて、其の玉器に唾き入れたまひき。ここに其のたま器に著きて、婢たまをねはなたず、故たま著けながら豊玉毘賣にたてまつりき。故其の玉を見て、婢に『若し門の外に人有りや』と問ひたまへば、『我が井の上の井の上に入坐す。いと麗しき壯夫にます。我が王に益りていと貴し。故其の人水を乞はせる故に奉りしかば、水をば飲まさずて、此のたまをなも唾き入れたまへる。是れねはなたぬ故に、入れながら持ち來りてたてまつりぬ』と

まをしき。故豊玉毘賣命あやしとおもほして、乃ち見めでて、目合して、其の父に『吾が門に麗しき人います』と申したまひき。爾に海神自ら出で見て『この人は天津日高の御子、虚空津日高にませり』と言ひて、即ち内に牽て入れまつりて、美智の皮の疊八重を敷き、また純疊八重を其の上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて御饗して、即ち其の女豊玉毘賣を婚せまつりき。故三年と言ふまで其の國に住みたまひき。

ここに火遠理命其の初の事を思ほして大きな歎一つしたまひき。故豊玉毘賣命其の歎を聞かして、其の父に白したまはく、『三年住み給へども恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きな歎一つし給ひつるは、若し何の故あるにか』と白し給へば、其の父の大神其聳夫に問ひまつらく『今且我が女の語るを聞けば、』三年ましませども恒は歎けかすこともなかりしに、今夜大きな歎したまひつ』と白せり。若し故ありや。亦ここに來ませる故はいかに』と答ひまつりき。故其の大神に、備

に其の兄の失せにし鉤をはたれる状を語りたまひき。ここを以て海神、悉に鱸の廣物、鱸の狭物呼び集めて『若し此の鉤を取れる魚有りや』と問ひたまふ。故諸の魚白さく、『このごろ赤だひなも喉に鯁ありて、物得食はず愁ふるなれば、必ず是が取りつらむ』とまをしき。ここに赤だひの喉を探りしかば鉤有り。即ち取り出でてすまして、火遠理命に奉る時に、其の綿津見大神教へまつりけらく、此の鉤を其の兄に給はむ時にのりたまはむ状は『此の鉤はおほち、すすち、まぢち、うるち』と言ひて後手に賜へ、然して其の兄高田を作らば、汝が命下田を作りたまへ。其の兄下田を作りたまはば、汝が命高田を作りたまへ。しかしたまはば、あれ水を掌れば、三年の間必ず其の兄貧しくなりなむ。若しそれしかし給ふことを恨みて攻めなば、鹽盆珠を出して溺らし、若しそれ愁ひ請さば、鹽乾珠を出して活かし、かくしてたしなめ給へ』と白して、鹽盆珠、鹽乾珠併せて兩箇を授けまつりて、即ち悉にわにぎも呼び集めて問ひたまはく『今天津日高の御子、虚空津日高上津國に出で

まさむとす。誰は幾日に送り奉りてかへりこむと白さむ』と問給ひき。故各己が身の長さのまに／＼日を限りて白す中に、一尋わに『あれ一日に送りまつりて還り來なむ』と白す。故其の一尋わに『然らば汝送り奉りてよ。若し海中を渡る時に、なかしこませまつりそ』と告りて、即ち其のわにの頸に載せまつりて、送り出しまつりき。故言ひしがごと、一日の内に送り奉りき其のわに返りなむとせし時に、御佩せる紐小刀を解かして、其の頸に著けてなも返したまひける。故其の一尋わにをば今に佐比持神とぞ謂ふなる。

是を以て備さに海神の教へし言の如くして、其の鉤を與へたまひき。故それより後いよ／＼貧しくなりて、更に荒き心を起して攻め來。攻めむとする時は、鹽盆珠を出して溺らし、それ愁ひ請せば、鹽乾珠を出して救ひ、かくしてたしなめたまふ時に、稽首み白さく、『あは今より行末汝が命の夜晝の守人と爲りてぞ仕へ奉らむ』と白しき。故今に至るまで、其の弱れし時のくさ／＼のわざ絶えず仕へ奉るなり。

ここに海神の女豊玉毘賣命自ら參出て白さく、『妾已くより姪めるを、今子産むべき時になりぬ。此を思ふに天神の御子を海原に生みまつるべきにあらず。故參ひ出で來つ』と申したまひき。故即ち海邊の渚に、鶺鴒の羽を葺草にして、産殿を造りき。ここに其の産殿未だ葺き合へぬに、御腹たへがたくなりければ、産殿に入りまじき。ここに産みまさむとする時に、其の日子に白したまはく、『凡てあだし國の人は、子生む時になれば』本國の形になりてなも生むなる。故妾も今本の身になりて産みなむとす。願くは妾をな見給ひそ』とまをしたまひき。ここに其の言をあやしと思ふして、其の方に産みたまふをかいまみたまへば、八尋わに化りて聞ひもこよひき。即見驚き畏みて、遁けそきたまひき、ここに豊玉毘賣命其のかいまみたまひし事を知らしてうら恥かしと思ほして、乃ち其の御子を産み置きて、『吾は恒は海道を通してかよはむとこそ思ひしを、吾が形をかいまみ給ひしがいと恥しきこと』と白して、即ち海坂を塞きて返り入りまじき。ここを以て、其の産れませる御

子の名を、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と申す。然れども後は、其のかいまみたまひし情を恨みつゝも、戀しき心に忍へたまはずて、其の御子をひたしまつる縁に因りて、其の弟玉依毘賣に附けて其の歌をなも献りたまひける。其の歌

赤玉は 緒さへ光れぎ 白玉の 君が装し 貴くありけり

故其比古遅答へたまひける歌

沖つ鳥 鴨さく島に わが寝ねし 妹は忘じ 世のこころに

この神話が、火遠理命と海神の娘豊玉毘賣との間の神婚傳説である。この神話は古來の神話中でもなかく、曲折に豊んだもので、彼の萬葉集にも歌はれ、童話中の童話として、古來日本の子供等に裕かな夢を描かして居る浦島傳説の如きも、この邊が起源をなして居るであらう。彼の魚鱗のやうに立並ぶ宮殿が即ち夢の國龍宮の宮殿である。龍宮城は吾々琉球人にまつては、ほんとうに憧れの仙域であるだけであつて、道に琉球にも此の豊玉毘賣式の神婚傳説は傳へられて居る。けれども波瀾重

疊曲折に豊んだ此の神話には及ばない。併しながら此の神話は、火遠理命の兄弟争の神話と、海神國の物語とは、元來は別個のものだと言はれて居るから、海神國の神話だけなら、琉球の神話も先づ同好異曲だと思ふことが出来る。長く書き現はすべき自分の文字を以て居なかつたし、それに特別な語部もなかつた琉球民族に、口碑として傳へて來て居ることは、却つて珍すべきである。この傳説は口碑として傳つて居るやうではあるが、ここには宮古島舊記に依つて紹介する。

昔、荷川取村の漁夫に湧川マサリヤと言ふ者があつた。漁に行つて海の魚を釣つたところが、この海の魚が忽ち美しい乙女に化けて終つた。漁夫は妙な氣に打たれて、彼の女とはかない契を結んだ。それから二三ヶ月経つてのこゝである。例の漁夫が同じ場所に行つて見ると、二三才位になる子供が三人何處からこもなくやつて來て、お父さんをちよつと連れて來いと、お母さんが申しましたこゝなれ／＼しく近づく。彼は不思議に思つて子供等を嘗つては見たが、後で子供等の

話に依つて二三ヶ月前の奇しい契のこゝを思ひ浮べて、今更のやうに吃驚した。そして三人が案内するまゝに、恐る／＼海底なる彼の女の宮殿に行き、居るこゝ三日三夜一個の瑠璃の壺を得て歸つたが、此の世ではすでに三年三ヶ月を経過してゐた。さてこの瑠璃壺には神酒が入れてあつて、飲んでも飲んでも盡きないそれに天上の甘露の味がしたので、之を飲んだ一家の者は何れも無病で長命したのみならずこの壺を得てから非常な金満家となつた。それで之を永代の家寶として誰にも見せなかつたが、何日の間にか島人の間に洩れて、評判がバツト擴がつた。或日のこゝ島中の老若男女が、この壺を見せよと押寄せて來た。主人は五月繩いと思つたか、此の神酒はいつも同じ味でもう飲み度くはないと言つた。言葉も終らない中に壺は白鳥になつて虚空に舞上つた。群衆は地にひれふして、願くは我が家に留り給へと祈つたが、壺ははるか東方指して飛んで行く。宮國村のシカホヤと言ふ家の庭に立つて居る木に落ちるかと思つて消え失せた。主人は其

の夜、この白鳥は富の神であるから、九月の内で卯の未の日に、物忌みして願つたら豊年が来るとの夢を見た。半信半疑で居たが、果して大世積あや船と言ふ神の船が、東方雲井の方からやつて来て、シカホヤ崎に泊り、神歌等聞けた。其のこゝこがあつて以来、シカホヤの家は頗る富裕の身になつたと言ふこゝこである。イロコはウロコで魚鱗のこゝこ。此處は宮殿が棟を並べ立連つて居る壯觀を魚鱗に譬へたのであらう。琉球語では魚鱗のこゝこをイリチ、屋根のこゝこをイリチャと言ふ。以てイロコ、イラカ、ウロコの音の變化を知るこゝこが出来た。猶又頭のフケをもイリチと言ふ。

ノギ(鯁)は咽喉に刺さ、れた魚骨である。和名抄にはある。琉球語では其の魚骨をンヂ(ノギの轉)といひ、又凡べて人体を刺すものを廣くンヂと言つて居る。木のンヂ、魚のンヂなき言ふ。

タシナムは苦しめ懲らすこゝこ。轉じて修練、ココロガケ、用意、沖繩では轉義とし

て遣つて居る。縫ひ裁のタシナミ等と言つて居る。

葦原中國はいたくさやぎてあるなり、我が御子たち不平ヤグサますらし

ヤグサムは日本書紀に不平、不知を訓んで居る。病み悩む意、琉球語では寡婦鰥夫のこゝこをヤグサミ、又はグサミと言つて居る。寡婦鰥夫は獨で懊惱するからさう言つたのであらう。怒るこゝこをクサミチュン(四段活用の動詞)と言へて居る。普通に言ふクサクとする等思合して見るにヤグサムの語源は明瞭であらう。琉球の脚本(組踊)にヤグミサン知ランミか、ヤグミサドアシガミか恐縮する、恐多いと言ふ意味に使つてあるのは、同語源の語であらうか。

ツトメテは其の翌朝のこゝこ。琉球語ではストウミテイと言つて、單に朝のこゝこ或はシテミテと言ふ所もある。朝御飯のこゝこをストウミテイウブンと言つて居る。

兄宇迦斯を召してのりて言ひけらく……

ナルは辱しめ罵るこゝこ。琉球語ではヌラユン(叱るこゝこ)ヌレーグト(小言)と言ふ

イガ作り仕へまつれる大殿内には……

イガは卑稱の二人稱の代名詞になつて居る。琉球の田舎でも其の儘二人稱の代名詞として使つて居る地方もある。が自稱代名詞として使つて居るのが普通である。元來は自稱代名詞であるかも知れない。自稱の代名詞が二人稱の代名詞に變るのも面白いではないか。之が複數を現す時には、イガドゥー（イガ供）或はイガター（イガ達）と言つて居る。

鳴はサヤラズ……

サヤラズはサハラズの古語。琉球語ではサヤルはサーユンと言ふ。サハル等とは言つて居ない。

垣下に植ゑし薑口ひびく吾は忘れじ

ヒビクはヒグ／＼の意で、辛いものを食べて口中がピリ／＼するこゝ、沖縄語でフイーラチユンと言ふ。

こゝに大久米命、天皇の命を其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、その大久米命の點る利目を見て、奇しと思ひて。

點るは入墨である。久米部の首領大久米命が入墨を施して居た事は、太古の大和民族に入墨の風習があつたこゝを語るのではなからうか。琉球の婦人（現在では四十才以上の）が手甲に入墨を施して居るのも、太古の遺風を見る事が出来る。琉球婦人の入墨が有夫の標號となり、貞操を確守する思想を現したことは中世の傳説として傳へられて居るこゝろであるが、起原は矢張り太古に存するのであらう。それは兎もあれ、二十年位前までは、女子が結婚するにすぐ兩手の甲に鮮かな入墨が施されたものである。今は文化の發達に伴つて、だん／＼見られないやうになつて來た。

天皇其の伊須氣余理比賣之許いでまして……

ガリ（之許）はモトの意。中古鎌倉あたりまでもよく使はれた語である。琉球語ではカイミなつて居る。此處許へはクマンカイ、彼の人許はアノツチユノトウクルン

カイなき言ふ。

一〇四

葦原のしけこき小屋に、菅疊いやさや敷きてわが二人寝し。

スガダタミは菅で編んだ敷物、古事記の別の個所にも皮疊、純疊と見えて居る。必ずしも今の疊のやうに厚い藁の臺がついて居るのではなく、今の藁やうなものであつたらう。そして現今のやうに室内一杯に敷きつめて置くのではなくて、夜寝につく時、客が見わたした場合にのみ平常は疊んでおいたものを出して來てのべて敷いたであらう。タタミと言ふ語の語源も之に依つて知ることが出来る。蓋日常疊をしきつめておいたのは、本朝においても大分時代以降つてのことで、昔は必要の折ばかり敷きつめておいたのである。琉球で那覇から北二三十里の山の奥に行くに、今猶彷彿として太古の風習を偲ぶ光景に遭遇する。一里も二里も、山間の險阻な小道を喘ぎ喘ぎ辿り着いて、谷間のささやかな民家を見つける。一寸一服と言つて立寄る。粗末な床の上には敷かれたものがない。奥の方に疊んであつた御座を取出して來ての

べて呉れる。何ぞ原始人を彷彿たらしめる生活ではなからうか。本土に於いても、さうした風俗が長い間續いて居たのであらう。中古の華かな時代まで圓座等のあつた事からも想像するに難くはない。沖繩の田舎に行くに、猶泰然ミワラウダの上にはアグラをかけた爺サンの姿を見ることが出来る。

此の天皇の御世に疫病さはに起り、人民死せて盡きなむとす。こゝに天皇うれひたまひて神床カムトコに坐しませる夜、大物主大神御イメに顯れて曰りたまはく『是は我が御心ぞ。故意カレ富多泥古を以て我が御前を祭らしめたまは、神の氣起らず國安平らぎなむ』と曰りたまひき。

イメは寝見イメの義で夢を言ふのである。琉球方言ではイミと言つて居る。

祖先の御靈や山の神、川の神其の他くさぐさの神様が、夢の中に姿を現して、色々告げ事をされることは、日本の文學上には、絶えず見られるところであるが、琉球民族も常に夢のために惱まされて來たのである。新教育の洗禮を受けた若い人々

一〇五

はさうでもないが、四十五六才以上の人、殊に婦人は、夢に驚かされては賣卜者を訪ねたり、或はユタミ言ふ豫言者見たやうな女をおこづれて、祖先の御告げを證明して貰つたり、夢の吉凶を判斷して貰つたりする。其の賣卜者やユタも屹度、何代目の先祖が何の御希望があるとか、何處の御岳から木を伐つたアラビ(崇り)だとか、或は古池や古井等を又元の通りに開いて呉れこの池の神や井の御頼みがあるとか判斷して呉れる。そしてそれ等の事を叶へて上げない時には家内の中の誰かが病氣に侵かされるとか、病死するとか驚かす。驚かされたものは、それを盲信して、家に歸つて佛様の前に額づくやら、物詣でに行くやら、御墓參りをするやらそれはくもても眞劍である。病氣に罹つても、疫病が流行しても矢張り神の崇り、祖先のアラビだとしてひれ伏す。崇神天皇の御夢に大物主大神顯れて『こは我が御心ぞ。故意富多多泥古を以つて我が御前を祭らしめたまは、神の氣起らず國安平らぎなむ』と仰せられる。琉球人の原始的崇教生活からして大体想像がつくのである。仰せの通

りに神の御前を祭らしめたから、疫病悉く熄みて天下が又元の平安に歸したと言ふあたり、祖先の御靈は子孫にも崇を興へるものだこの信仰を琉球民族に懐かしめて居る事に遠く其の源を興へて居るではないか。降つて平安朝時代に盛んに行はれた物忌祈禱と相俟つて、今猶琉球民族に病氣の折は醫療よりも先づ祈禱を先にせしめて居るのではあるまいか。而して彼等が見るこの神は、決して絶對的の神ではなくして、仮令怒るも慈父の怒の如きもので、額づけば直ちに慈母の如き温顔を以つて頭をかいなで給ふ親しい優しい神様である。山川の神、海の神、竈の神井の神と言ふも決して荒ぶる魔神でもない、彼等を育み、彼等を擁護して、常に幸福を齎らさんとする神である。アラビと言ふも畢竟彼等の行動に對する一時の怒である。彼等の信仰は、高尚で深遠なところにはなくして、却つて單純な手近なところに存するのである。神がかりに依つて神の御告げを知り、神の前にひれふした原始的神道は未だ、沖繩において其の面影を偲ぶ事が出来る。

此の意富多泥古ミ言ふ人を神の子ミ知れる所以は、上に言へる活玉依毘賣それ容姿よかりき。ここに神壯夫ありて、其のかほすがた比なきがさ夜中にたちまち來つ。故相感でてすめる程に、幾時もあらねば其のをこめはらみぬ。ここに父母其のはらめるを怪みて、其のむすめに『汝は自ら姪めり。夫なきに如何にしてかもはらめる』と問へば、答へけらく『うるはしき壯夫の其の名も知らぬが、夜毎に來てすめるほぎに自らはらみぬ』といふ。是をもて其の父母其の人を知らまくほりて、其のむすめに誨へつらくは『赤土を床のべに散し、へそを針に貫きて、其の衣のすそに刺せ』と教ふ。故教へしごとしてあしたに見れば、針つけたりしをは戸の鉤穴よりひき通り出でて、唯殘れるをは三勾のみなりき。故ここに鉤穴より出でし狀を知りて、糸のまに／＼尋ね行きしかば美和山に至りて神の社に留りにき。故其の神のみこなりミは知りぬ。故其のをの三勾遣れるに因りてなも、其處を美和にはいひける。

是は有名な三輪山傳説である。神婚傳説として日本の古代神話中でも可なり面白い

ものの一つであり、又琉球神話中にも殆ど同型のものがあるから煩をいごはないで全文掲げて見た。琉球群島には數多の神話傳説があつて、是等を古事記、日本書紀の神話傳説と比較研究した時、吾等は様々の興味多い問題を捕へる事が出来る。この神婚傳説の如きも、方々で異つた形式で行はれて居る。ここには一番有名な宮古島書記に書かれて居る傳説を、煩を厭はず全部紹介する。

宮古島の平良村のすみやミ言ふ所の長者の家に美しい一人娘が居た。十四五歳の頃懐妊したので、其の父母が怪んで夫が居ないので何うして懐妊したかミ問うたら、麗しい男子の其の名も知らぬが夜な／＼忍んで來たが、來たかミ思ふといつしか心も虚になつて、後は夢を見た様な心地がしたが、いつしか遂に姪むやうになつたミ答へた。するミ父母は其の人を知らうミ思つて、千尋の續麻の先に針をつけて、男が來たら直ぐ之をそのカタカシラに刺せミ言つて娘に渡した。娘は其の夜父母が教へた通りにして置いた。夜が明けて其の糸のまに／＼尋ねて行つた

ら漲水嶽の内なる洞穴の中に二三丈計なる大蛇の首に針が刺してあるのを見て、父母は且つ驚き且つ歎いた。娘は其の夜この大蛇が枕元に來て、我はこの島開闢の戀角の神で、此の島守護の神を生まうと思つて、お前の所に夜なく忍んで來たのである。お前は屹度三人の女の子を産むに相違ない。其の子が三歳にもなつたら、漲水嶽へ抱いて來いと言ふ夢を見て、父母に告げたら父母はこれを聞いて全く不思議なことであると思つた。十ヶ月程經つて愈々三人の女の子が生れた。三歳になつて漲水嶽へ伴れて行つて見るに、父の大蛇は兩眼日月の如く、牙は劍の如く、紅の舌を出して這出したが、首は藏の石垣に乗つ掛け、尾は御嶽の石垣において鳴き出した。之を見た母親は子供等を抛出したまゝ、氣絶したが、子供等三人は何の懼れるこゝもなく、父の大蛇に這ひかかり、一人は首に、一人は腰に一人は尻にすがつてひしと抱付いた。大蛇は紅涙を流して、子供等にキッスした後で昇天し、子供等三人は御嶽に這入て宮古島の守護神となつた。

この三輪山傳説と宮古島舊記の傳説とは、ほんまに面白い對照となるではないか。●●●ヘソは續んだ麻を圓く卷いたものを言ふ。琉球方言で、芭蕉糸をクル／＼卷いたものをチャービシ（ヲベソの轉）と言つて居る。

●●●ハラムも矢張りハラムと言つて居る。魚類の卵巢のこゝをハラミと言ふ。

又日子坐王をば旦波の國に遣はして玖賀耳命御等をこらしめたまひき。

●●●トルは命を取る意で殺すこゝ。古くはトルと言つたが、沖繩では今でも化物にトラリーンなき使つて居る。

ここに初めて男の弓端之調、女の手末之調をたてまつらしめたまひき。

●●●ミツギは見繼の義で、供給する意から出た語である。琉球語でも親にミチチする。姉にミチチする等使つて居る。

手末の調とは、手先で作りに上げた糸又は織物を貢ぐ事、所謂婦人に對して課した人頭税であらう。或は未だ崇神天皇の朝には人頭税と言ふまで行つて居なかつ

神の名を附けたりしたのと思ひ合せて、頗る興味ある問題である。琉球にも生れる時の場所であるとか、環境であるとかに依つて童名を名づけた事があつた。で琉球人の童名には出産逸話を物語るものもまゝあつた。最も普通の場合に於いては、祖母に當る人が赤ん坊を抱いて庭の真中に出て、(或はヒノカンと言ふ竈の神の前で)祈願をさ、けて米粒でコメウラを取つて決定するのである。そして多くは、祖父母に當る人、若くは曾祖父母に當る人の名をつけるのが普通である。けれども頗るの安産で便所で産んで終つた時なごには、便所には何處の家でも豚を飼つてある因縁から武太(ンーター)と言ふ命名する慣例があつたやうである。其のンーターが變化して琉球人の童名にはンートー、ンテー、ンタシーと言ふのが多い。又琉球人にはカマド、カマーと言ふのが多いが、之も竈の前で生れたのに命名したのが起源であるらしい。琉球では現在竈の事をカマー言つて居るが、古い時代に於いては吾々沖繩人の祖先も、古事記に出て居るやうに矢張り竈のこゝをカマド言つて居た事

を想像することが出来る。テテ知らずの子を生んだ時も、テテ親が判然するまでカマドに仮りに命名しておく地方があつた。

又琉球人の女の名前に、オトと言ふのが大分あるが、古代に於いて弟柵機姫であるとか、おとひめであるとかのオトと同じやうに女を親愛して呼んだ事の面影を残して居るのではあるまいか。又父親の遠い國に旅をして居る場合には仮令男の子でも女の名前のオトを以て名づける事が通例になつて居る。琉球人には姉妹の靈はヲナイガミと言つて、常に男の兄弟の旅先に加護を垂れて居ると言ふ俗信があるから、旅なる父の身の上に幸福あらしめようと言ふ心からであつたらう。男の子に仁王と言ふのが聞々あるが、是は幼少の折りに余りに病弱なので、山門の仁王サンに祈願してつけ代へた名前である。最も是等のこゝは其の起源を説明するだけで、現今ではンーターと言つたからこゝて必ずしも便所で生み落されたとは決つて居る譯ではない。

琉球人の士流以上には、名乗以外に前に言つた童名と言ふのをつけるのが普通であり、又平民は其の童名ばかりで呼んで行くのであるが、なか／＼奇抜なものも出て来る。それに接頭美稱の『思』『真』や接尾美稱の『金』が附加して居る事は、古代の面影が偲ばれる感がするから次に並べて見る。

△貴族

△士族

△平民

思徳金

思徳

徳

思五良金

思五良

五良

思松金

松金

松

思次良金

思次良

次良

思樽金

樽金

樽

思加那金

思加那

加那

思龜金

思龜

龜

思金松金

金松金

金松

思小樽金

小樽金

小樽

思惠樽金

惠樽金

惠樽

思真境

真境

境

思戸金

思戸

於戸

思玉金

玉金

玉

思武太金

思武太

武太

思武樽金

武樽金

武樽

思真吳添

真吳添

吳添

真蒲戸金

真蒲戸

蒲戸

真山戸金

真山戸

山戸

真三良金

真三良

三良

眞市金	眞市	市
眞麻刈金	眞麻刈	眞刈
眞仁牛金	眞仁牛	仁牛
眞玉津金	玉津金	玉津
眞鶴金	眞鶴	鶴
眞満金	眞満	満
眞牛金	眞牛	牛
眞加戸樽	眞加戸	眞加
眞鍋樽	眞鍋	鍋
眞錢金	眞錢	錢
眞如古金	眞如古	如古
	眞吳勢	吳勢

眞勢津	眞勢津
眞多知	多知
眞仁王	仁王
眞百歳	百歳
眞平藏	平藏
眞津比樽	眞津比
眞久路目	久路目
眞嘉春	嘉春
眞刈目	刈目
眞志保	志保
眞満及樽	眞満及

最も上に掲げたものは、享保十四年の琉球政廳系圖座の調査に據るもので、現今の

琉球では三四分通りしか残つて居ない。殊に女の名前なきは著しく變つて来て、千代子だの秋子だの雪子だのミ隨分ハイカラになつて居る。

小碓命はニシヒムガシのあらぶる神、まつろはぬ人ごもを平けたまひき。

●ニシは琉球では本土に於ける北をさし、ヒムガシと言ふ言葉はない。東のこをアガリと言つて居るが日がアガルと言ふ意であらう。西のこをイリに言つてるのも日の入りと言ふこであらう。此の方位の名稱は、琉球民族の移住系統を知る有力な材料なるもので、金澤庄三郎博士の名説があるからこゝに引用する。

言語の研究では他のもので知るここの出来ないものさへ知るここの出来るが、これを適切ならしめる爲めに、沖繩人は何處から来たかと言ふこに就いて私の考を述べるこに致しませう。沖繩人は何處から渡來したものかと言ふに就いては歴史にもなく、又何等の記録もないのであるが、言語學上から沖繩人の祖先が九州から来たと言ふこを證する二三の事實があります。第一方角の名稱によつて

九州から来た事が明かにわかります。先づ日本語アイヌ語及朝鮮語の三つを比較研究して見ませう。朝鮮語では南韓のこを古くはアリヒシカラ（日本書紀に見ゆ）ミ申しますが、このアリヒは今日の朝鮮語のアルプ即ち前（南）ミ同じ言葉であります。さうするミアリヒシカラは前の方の韓と言ふ意味であつて、朝鮮人が北より南に向つて進んだこを證する唯一の言葉であります。日本語のヒンガシと言ふ言葉は日に向ふと言ふ意味で、日本人は東に向つて進んだこが判ります。又ニシ（西）と言ふ言葉はイニシ（過去）と言ふこであるから、自分等が通つて來た所と言ふ意味でありませう。アイヌ語で東のこをモシリバミ申しますが、モシリは陸、バは頭と言ふ意味であります、又西の事をモシリゲシ申しますが、ゲシは尻の事であるから、これは陸の尻と言ふこになります。この方面に關する言葉の研究から、朝鮮人は北から南に向ひ、アイヌ人も日本人と同じく西より東に向つて進んだと言ふこがわかります。今沖繩語を研究して見ます

れば、東をアガリ、西をイリミ申しますが、太陽のアガル所をアガリミ言ひ、太陽の入る所をイリミいうたのは論ずるまでもないことであるが、北のこをニシミ言ふのは妙であります。何故に北のこをニシミ言ふのか。前にも申した通りニシはイニシ（過去）ミ言ふ意味であるから、これに依つて沖繩人が北より南に向つて進んで来たこが明かになります。

あさけに厠に入りたりし時、さらへてつかみひしぎて……

●●●ヒシグは壓しつぶすこ。琉球方語ではフィシヂェン又はフィーヂェンミ言つて居る何ちらも四段に活く。

故^{カレ}其の酣なる時になりて、みふところより劍^{タチ}を出し、熊曾がコロモのクビを取りて、劍もて其の胸を刺し通したまう時……

●●●タチ（劍）のこはタチミ言つて、劍（ケン）ミ字音で言ふこはない。カタナも其の儘カタナミ言つて字音でタウ（刀）ミは言はない。

着物のこは普通にチン（キノの轉）ミ言つて居るが、上流では既に説明したやうに、ンス（ミソの轉）ミ言つて居る。コロモは僧衣をクルン（コロモの）轉訛ミ言ふだけで單に着物を表はすために使はれて居ないやうである。併しクルンゲーイ（コロモガヘ）ミ言ふ言葉も遺つて居るから、昔時において使はれて居た事は證明が出来よう。又衣裳ミ言ふ事もある。クビは衿のこ。琉球では決してエリミは言はない。

●●●クビミ其の儘使つて居る。其のクビのこをフスムンミも言つて居るが、これは衿は細長いからホソモノ（細物）の轉で、古事記や日本書紀以前にあつた言葉のやうに考へられる。衿^{クビ}を取るミ言ふのも俗に言ふ『胸グラを取る』に當るが、琉球でもクビカチミーンミ言つて居る。

ひむがしの方十二道のあらぶる神、まつろはぬ人ごもこむけヤハセミ……

●●●ヤハスは和平の字を當てて、多くは歸服させる意で古事記に使はれて居るが、元來

は怨をやはらける意に使はれて居るやうである。琉球ではヤフアラケエンと言つて寧ろ第二の意味で汎く使はれて居る。

悉に荒ぶるエミシをも言向け、亦山川の荒ぶる神をもやはして歸り上ります時に足柄の坂本に到りまして御糧カレヒきこしめす處に、其の坂の神白き鹿カレになりて來立ちき故其の昨遣ヒルの蒜ヒルの片端もて……

●●●●●
エミシは蝦夷にてアイヌを指して言ふ。琉球でエビシと言つてエミシと言はない借字の蝦夷の蝦から見てもエビシが古い形であつたらう。

●●●●●
カレヒは乾飯(カレイヒ)で飯を乾したものの、旅に持つて行つて湯や水でほこほして食ふものである。琉球ではカレヒと言ふものはないが、御飯のこみをウバヒ又はウバンと言ふ地方がある。是は甘飯ウワイヒの轉訛ウワイヒを見て差問へない。首里那覇では御飯のこみをウバンと言つて居るが、之は又ウバンの轉訛であらう。首里では朝御飯のこみをストウミテウバン(ストウミテ)、午飯をアサウバン、夕御飯をユフ

ウバンと言つて居るが、地方に依つてはストウミテヒ(ツトメテヒ)、アシヒ(アシヒ)、サイヒ(サイヒ)、ユフヒと言ふところがあるが、是もイヒを以つて説明するこみが出る。アシヒをオヤツと言ふところもあるが一地方に過ぎない。午飯をアサウバン、アシヒと言ふこみは少々變に聞ゆるが、ツトメテ朝との關係を考へ、猶古代人が時間ヒに對する觀念を想像したら十分納得が行くであらう。ウバンのウを接頭語御ミしブンを飯の轉訛ではないかミ反問する人があるかも知れないが、之は琉球民族の古代の生活と言語を考へない單純過ぎる解釋であらう。佛前に供へるウブクが矢張ウバケ(甘膳)の轉であるこみを考へたら一層明瞭になる。赤飯のこみを汎くカシチヒと言つて居る。之はコシキイヒの轉訛であらう。御飯を蒸すに使ふコシキは萬葉集に行つてしか文献には現はれて來ないが、簡單なものは矢張琉球民族が南島移住の折にすでに持つて居たのであらう。コシキには今でもクシチーと言つて居る。

イヒミカコシキミカ言ふ語から想像して見るに、琉球民族も矢張瑞穂の國の大和

民族同様米食をして居たと言ふ事は十分に知れる。そして彼等が年々歳々有名な暴風に襲はれては不作の年が續き、飢餓と戦つた憐な生活は文献に表はれた琉球飢饉史なしに想像しても泪なしには居られないのである。一年何回も收穫される甘藷に鼓腹して居る現代琉球人は、三百年の昔、支那からカライモを傳へて來た大恩人總管野國の墓前に日々感謝の涙を注ぐべきである。

日本武命がヒルをきこしめされて居たと言ふこともなか／＼面白い。ヒルはノビルのことだと言ふ學者もあるが、後段に行つて使ひわけがあるから矢張り現今普通に言ふニンニクのことである。言海には『ニンニクは忍辱の字音、僧家の隠語に起る。臭甚しく五辛中の重きものなればいふこと。又古名オホビルと言ふ』とある。沖繩ではニンニクの事を單にファイルと言つて居る。このファイルが言海の言ふオホビルよりも古い言方ではなかつたらうか。沖繩の田舎の人は、現に好んでこの臭いヒルを食べて居る。猶大晦日の晩には、一年中の邪氣を拂ふと言ふ意味で、このヒル

を、靈前に供へる食膳にも、家族の食膳にも添へる習慣がある。又疫病なきが流行する時に、子供等が首から胸にかけて守袋にもヒルを入れる地方がある。日本武命が食べ殘の蒜を以て、白い鹿に化けて來た坂の神を打たれたと言ふことと合せて見るに大和民族にも、ヒルは邪氣を拂ふと言ふ俗信があつたと言ふことが分る。沖繩人が邪氣ばらひとして、大晦日の食膳にヒルを供へる俗信も、其淵源や實に遠いと言はなければならぬ。

古事記には時々山蒜ノビルと言ふものが出て來るが、之は沖繩でもよく畑や荒地に自生する球根雑草の一種で、沖繩ではニービル(ヌビルの轉)と言つて居る。萬葉集等に出て來る『菜摘みする』の菜の一種で、之は珍味として古代人の食膳を賑はしたものの一つであらう。沖繩でも野菜に乏しい時とか、野菜を自作することが出來ない貧民シモは、よく野原に出て、『ヨモギ』や『ハルノゲシ』や『ハルノレン』等の雑草を摘取つて來て食つて居る。野菜栽培の道知らなかつた原始人が、食糧品

の一部を雜草に求めたのは當然のことで、平安朝以來大和民族に珍重された春の七草の越なきは、琉球人の生活を透して想像するに難くないのである。而して『ハルノゲシ』のこごを『マーオーフワー』と言つて居るが、マーは接頭語である。オーは青であらう。フワー『ハ』が菜を言つた事は祝詞等に藻菜をモハミ言つて居るのでも判る。又食用に供する雜草や其の他の葉菜を凡べてオーフワミ言ふが、之も本は菜で古語であると言へるであらう。オーは勿論青であらう。

ここに美夜受比賣、それ意須比の裾にサハリノモノ著きたり。故其の月經を見そなはして御歌よみし給はく。

久方の 天の香山 利鎌に さ渡る代 ひはほそ 手^{カヒナ}弱腕を まかむこは 吾は
すれご さ寝むこは 吾は思へご 汝が著せる おすひの裾に 月たちにけり。
オスヒは襲の字を宛てて、古代の男女が顔を隠すために頭から被つて裾まで長く垂れた衣服である。後世の被衣であるが、此の時代にはまだ着物の形になつて居な

かつた單に長い布であつた。之が未開時代の遺物ではないかと言ふ學者もある。神を祭る時にも、女の家に通ふ時にも用ひたらしい。琉球の田舎へ行くに風呂敷大の布で髪を包んで畠を耕して居る少女を見る。其の風呂敷をウチユクイミ言つて居るが、是はオスヒの變形のものではなからうか。オスヒミウチユクイミは語形に於いても似たところがある。汎く風呂敷のこごをウチユクイミ言つて居る。

サハリノモノは月經である。琉球に於いてはサハイ(サハリ)又はチガリ(ケガレ)と言ふ。チチノムン(ツキノモノ)とも言ふさうである。月經を古代人の様に不淨として忌んで物詣等にも慎まれた事は前にも言つた通である。又大和武尊が、美夜受比賣のオスヒの裾に月經の裾に赤いものがついて居るのを御覽じて『月たちにけり』と戯れ給ふた事も琉球人が月經のこごを『十五日』と言つて満月の意味で隠語に使ふのこよく似て居る。

此の『月たちにけり』については、宣長は赤いものがついて居るのを赤裸々に言

つては女を辱かしめるから譬喩的に言つたのだと説き、守部は文字通り長い月日を経過したと説いて居るが、私は宣長の説を取る。

『この山の神はムナデに直に取りてむ』このりたまひて、其の山にのほります時に、山邊に白き猪逢へり。

ムナデは徒手、空手の意で、武器を持たないこと。徒舟、徒車等も使はれて居る琉球語では、シナディー、シナ茶碗、シナ箱等も使つて居る。又徒舟のこゝをカラ船も琉球では言つて居るが、之は古事記の枯山等から來た語ではなからうか。或は貝殻のカラから來た語かも知れない。

御ただむきに頼なせるシシありし故に……

シシは肉のこゝ。琉球では六十歳以上の老人ならシシでなくては通用しない。牛のシシ、魚のシシと言ふ。又肉親のこゝをもシシと言つて居る。

於是大后カムガカリして言教へさしたまひつらくは『西の方に國あり。金銀コガネシロガネをはじ

めて、目のかゞやく種々の珍寶其の國にさはなるを、吾其の國をよせたまはむ』このりたまひき。

カムガカリはカミガカイと言つて居る。今でも神女やユタなぎには、神が乗移つて色々のこゝを言はせて居る。婆サン等は神の前に平伏するがやうにして恐懼する。

三四十年前までは神女の傳へる託宣一言に依つて、村中の人を動かしたさうである琉球も矢張神の國なるかなである。

コガネは金のこゝ。黄金（キガネ）の轉訛萬葉集ではクガニと訓んで居る。琉球でもやはりクガニと言ふ。黄金色に熟する小い蜜柑があるが、それをクガニと言つて居る。クガニと言ふのが古音であらう。シロカネは銀のこゝだが、琉球では鉛のこゝを言ひ、銀にはナンジャミ言つて居る、之は精鍊された銀を南鐐と言ふこゝから轉じたのであらう。

故其の御船カのなみ新羅の國に押しあがりて、既に國なからまで到りき。

●●● ナカカは半分のこご。源氏物語や宇津保物語にも見えて居るから平安朝あたりまでも生語であつたらう。琉球ではまだ盛に使はれて居る。ワタナカラ（ワタは腹のこご）一チナカラ。茶碗のナカラ等言ふ。

筑紫のまつらがたの玉島里に到りまして、其の河に御食せず折しも、四月の上旬頃なりしかば、其の河中の磯に坐して、御裳の糸を抜きこり飯粒^{イヒボ}を餌にして、其の河のあゆをなも釣らしける。

●●● イヒボはイヒツブの意。疣（イボ）と言ふのも飯粒に似て居るからさう呼んだのであらう。琉球ではイボと言ふ語單獨には残つて居ないが、土佐日記にある『いひほして鯛釣る』と言ふやうにイヒブーッシタマンチンと言ふ諺で遺つて居る。此の諺はわびで鯛を釣ると言ふ諺と同様な譬に使はれて居る。イーブーと言ふ雑魚が居るからイーブーは其の意かとも思はれるが、矢張り太古に於いて飯粒で魚を釣つた名残を見たい。

猶神功皇御手づから、糸を垂れてアユを御釣になつたと言ふこごはなか／＼面白い話である。古代の婦人は矢張男と同じやうに漁をもして居たと言ふ面影を偲ぶこごが出来る。琉球でも海近い部落の婦人共は、夜續松を翳してまで遠淺に出かけて行つて明日のカテ位は漁つて来る所がある。兎に角一般の琉球の婦人は、今でも男勝りに甲斐／＼しく働いて居る。貴族や資本家の階級になるこご概して婦人は労働しない。蓋し是は日本全國に亘るこごで、他府縣でも琉球の婦人同様、否寧ろ以上に働いて居る婦人はいくらかもある。東京あたりから来て、天降りの的の視察をなして、琉球は男逸女勞の國だなきと論評するのは、古代大和民族の社會相を知らない愚論に過ぎないだらう。古代の大和民族は女性も男性も力を併せて働いた。生活の道には現代の労働者や田舎乙女のやうに、何處までも男性ばかりに頼らなかつた。さうだから女權も相當に高かつた。男性に寄生しなかつた女性は決して、男性から虐けられずに濟み居つたのである。何處までも強く生きるこごが出来た。さうした社會

相は、日本一般の百姓や労働者の生活に十分に窺知することが出来るが、琉球の農村にも濃厚に表はれて居る。儒教の匂も農村に於いては、情ない程稀薄である。

こゝに父が言ひけらく、『こは天皇の坐しなり、かしこし、我が子使へ奉れ言ひて其の家をよそほひ飾りて候ひ待てば明日入りましぬ。』

サ●モ●ラ●フは中古後ではサフラフミなつて居るが、沖縄でもサフラフミ言つて居る。

中古以後の本土の言語に影響されたとも見られようが、恐くは琉球に於いて獨特な發達をしたとも考へられよう。

御這入りなさいを琉球語ではイミサフレミ言つて居るが、これはイリサフラへの轉訛であらう。いらつしやいましをメンサフレミ言ふがこれも參りサフラへの轉訛か。序に言ふ、行きませうと言ふこゝを琉球語でイチヤビラ、參りませうをチャーピラミ言ふ。後代平安朝鎌倉期の侍ら言葉を知る人には『イチヤビラ』が『行き侍ら』で『チャーピラ』が『來侍ら』の轉訛である位のこゝは説明を待たずして了

解が出来よう。

いざ子ごも

野^ヌ蒜^{ビル}摘みに

蒜摘みに

我が行く道の

かぐはし

花たちばなは

ほづ枝は

ヌ●ビ●ルを野生の蒜の意であらうと言ふ。琉球ではニービルミ言つて田畑に生ずる雑草であるこゝは前にも説明して置いた。今ニンクミ言ふ大蒜は、野生のヌビルを取つて來て栽培したものであらう。

三つ栗の

中つ枝の

ほつもり

あから嬢女を

いざささば

よらしな

ホ●ツ●モ●リは日本書紀にはフホゴモリミなつて居るために、宣長、契沖、守部等は、

三人とも各異つた解釋をして居る。琉球語では花がまだ開かずに蕾んで居るのを花のフチムイ（ホツモリの轉訛）と言つて居る。私は『花がまだ蕾であるのを言つたのである』この契沖の説を取る。猶其のフチムイのこをククムイとも言ふ。虫にさ、れて脹れるこをもフチムンと言つて居る。

アカラヲトメは阿迦良表登賣になつて居るのに、わざ／＼漢字をこぢつけて『赤ら嬢子』なきこした人がある。そして血色の良い少女を言ひ、漢語の所謂紅顔の處女の義なきこ解いて居る。是も琉球語で完全に解ける。琉球では十分に發達して、最早獨前の生活をなし得る小牛や雛を、アカラーウシ、アカラードウイと言ふ。又十四五にもなつて、一人前の行動が出来るやうになつた子女をも、もうオヤアカレしたと言ふ。アカレは別れる離れる意。中古文あたりにもよくアカレ／＼なきこ見ゆる言葉である。故に私はアカラヲトメを十六七の最早獨立して行動をなし得るやうになつた少女と解して行き度い。其の時代の少女であるから、血色麗しい紅顔の處女

であるこは勿論である。

ここに日の耀ヌジのこ其のほこを指したるを……

●●ヌジは虹で沖繩ではヌージと言つて居る。萬葉集の東歌にも出て居る言葉である。

和名抄にはニジこなつて居るが、古事記傳の本居宣長はヌジと訓んで居る。矢張琉球方言のやうにヌジと訓むのが、日本古代の發音であつたらう。

國中にケブリ立たず。國みなまづし。

●●ケブリは煙。現代のマ行音が古音に於いてバ行音になつた例は國語に澤山あるやうに、國語でのマ行音が琉球方言でバ行音になる場合が大分ある。セマイと言ふ形容詞が琉球方言ではシバサンこなつて居る。琉球方言ではケムリはキブシこなつて居る國語でのリがイに變ずる例は澤山あるが、シと變ずる事は滅多にない。

ここを以て大殿ヤレ壞れて、こみ／＼に雨漏れきもかつてツクラヒたまはず、憾（ヒ）を以ちて其の漏る雨を受けて、漏らざる處に遷り避けましき。

ツクラフは修理するの意、ツクルに繼續作用を表はす副語尾のフが添つて活用する語である。琉球方言ではツクリに矢張副語尾のユンが添うてツクリユンとなつて居る。ヤレデンツクリユン等と言ふ。

穢(ヒ)は和名抄にイヒミ訓んで居る。雨水を受ける樋である。琉球方言ではテイミ言つて居る。和名抄のイヒミ關係があるやうに思はれる。

ヤルはヤブル意。ヤルは徒然草あたりまでも使はれて居る。琉球語ではヤルミ使つて居る。ヤリ障子、ヤリデン、ヤリ書物。

乃ちかたりけらくは『天皇はこのごろ八田若郎女に婚ひまして夜晝たはれますを、若し大后は此の事聞しめさぬかも、靜かに遊びいでます』とぞかたりける。

カタルは告げ知らすこと。又は互に相談すること。琉球の田舎に行くにカタルと言ふことを聞いて話すと言ふのを聞かない所がある。ムノイヒカタレなきは盛に使はれて居る。

大后のいでませるゆゑは、奴理能美が養ふ虫、一度は匍ふ虫になり、一度はカヒコになり、一度は飛ぶ鳥になりて、三色に變るあやしき虫あり。

カヒコは殻を訓んで卵のこと。和名抄には卵をカヒコと訓んである。琉球方言では卵のこみをクーガミ言つて居るが語源には關係がある。カイは貝、殻の義、コは子の義、語源が説明されて居るが、琉球語でも貝、殻のこみをクーミ言ひ子もガミ轉訛する。ウマゴ(孫)のこみをウマガミ言ふ。カイコからクーガミ轉化したのであらう。貝のこみをケーミ言ふこともあるから轉訛の順序を考へることが出来る。タマゴは玉のやうにあるから言ふ語であらう。

アヤシミ言ふ形容詞も汎く使はれて居る。漢語から來た不思議も使はれはするが、却つて純國語のアヤシが餘計に使はれて居る現象も面白い。

八田の

一本管

子持たず

立ちか荒れなむ

あたら菅原

ここをこそ

一四〇

菅原といはめ

あたらすがしめ

アタラは惜しいこと。惜しいものを琉球語ではアタラシームンと言ふ。新しいものをミームンと言ふ。ミームンはニームの轉訛であらう。新米のこころをミームンと言ふやうに人の姓にも新がよく使はれる。

天皇其の弟速總別王を媒として、ママ妹女鳥王を乞ひたまひき。

ママイモは庶妹である。琉球語でもママ母、ママ兄弟と言つて居ることは國語も同じことである。義理の母等とは言つて居ない。

ここに天皇、直に女鳥王の坐す所にいでまして、其の殿戸のシキミの上に坐しき。

シキミは闕で、和名抄にシキミ俗に言ふトジキミとある。琉球語ではシチミとなつて居るがチはキの轉であり、ミは落ちて終つたのであらう。

ここに穴穂王子軍を興して、大前小前宿禰をカクミ給ひき。

カクムはカコム（圍）の古語。沖縄では決してカコムとは言はない。

根臣即ち其のゐやじろの玉籬を盗み取りて、大日下王をヨコシまつりけらく……

ヨコスは讒を訓み、横を活用させた言葉であらう。琉球語ではユクスミ發音して、他人の妻を引かけたり。處女を引かけたりすることを言ふ。又川の水を溝に導いて外の方に流れさせることをも川の水ユクスンと言つて居る。琉球語でそらごこのことをユクシと言つて居るが、ユクスミ言ふ動詞の名詞形であらう。蓋ユクスためには色々ミ虚言を並べ立てる必要があるからの謂ではあるまいか。

己が妹やひこしヤカラの下むしろにならむ……

ヤカラは家族の義。同腹を表すハラカラは琉球語には遺つて居ないが、ヤカラは今に使はれて居る。けれども原義の家族の意は滅んで、徒輩の意に使はれて居る。猶轉じて偉いと譽める時にヤカラヤンと言ふこともある。生族血筋を表すウカラらしい語は大分形が變化して殘つて居る。上流の言葉でウンバダンと言ふのがあつて血

族と言ふ意味を表して居る。ウンバダンの二つのンは這入り込んだ音で、カ行がハ行に變化する例は國語にもあるが、琉球語にも尠くはない。又ラ行音がダ行音で言はれる例は琉球語、特に琉球の標準語たる首里語には度々出て來るものである。

三吉野の

をむろのタケに

シシ伏すこ

誰ぞ 大前にまをす

安見しし

吾が大君の

シシ待つこ

吳床に坐し

白妙の

袖きそなふ

たこむらに

虺かきつき

其の虺を

アキヅはや咋ひ

かくのここ

名に負はむこ

そらみつ

大和の國を

アキヅ島こふ

●●タケは岳で、琉球語でタキミ言ふ。神のいます所をタキミもムイ(森)ともいふ。又國語の岳も同じく汎く山をも指して言ふ。此の森、岳の木を伐る時には神の祟があるものとして琉球人には恐れられた。ために昔は樵夫の入らない深い森林も隨所に鬱蒼として居たが、近來は科學的人智の進歩に依つて、是等の森林が、全く濫伐されるやうになつて來た。

●●シシは猪のここ。古くは井ノシシと言はずに單にシシと言つた。琉球でも北國頭の山中には今猶猪が澤山居るが、狩人は井ノシシと言はないで單にシシと言つて居る琉球語の肉を表すシシミ言ふ語も、これから來たのではなからうか。序にカマシシのここを言つて見たい。太古に於てはカモシカのここをカマシシと言つた。琉球語で佛頂面のここをカマジシミ言つて居るが、カマシシの面相から聯想しての譬喩的の言ひ方ではなからうか。若しこの推定が確實性を帯びるここになつたら、琉球民

族は曾つてはカモシカにも親しんだここのある民族であらう。
●●●
アキヅは蜻蛉の古名。琉球では今でも古名の儘アーケーヅーミ言つて居る。琉球民
族もあつばれ秋津島の民族たるかなである。

萬葉集の部

籠もよ

みこもち

ふぐしもよ

みふぐしもち

此の岡に

菜採ます兒

家聞かな

名告らさね

空みつ

大和の國は

おしなべて

吾こそをれ

しきなべて

吾こそをれ

吾こそは、名告らめ、家をも名をも

コ(籠)はカゴのこご。和名抄には竹器也とある。籠の訓み方については、學者
間に随分議論されて居る。加藤千蔭や橘守部や加茂真淵等はカタマ(堅間の義)と

訓み、契沖はカタミと訓んで居る。私は鹿持雅澄や木村正辭等の説に随つてコミ訓みたい。琉球では鳥籠のこみをトウイノクー、目白籠のこみを目百ノクーと言つて居る。クーは言ふまでもなくコの轉訛である。近江に鳥籠山と言ふ地名もあるから籠のこみを古くはコミ言つたに違ない。沖繩ではカゴのこみをソーキ、バーキと言つて居るが。キは矢張コの轉訛であらう。コ、ケ、キは古は汎く物を入れる器具に名づけたのであらう。食物を盛る器に筥（ケ）と言ふものがあり、櫛を入れる器具を玉櫛筥といひ、麻を入れる器具に麻筥（ヲケ）と言ふものがある。琉球には唐匱の如き衣類を入れる匣にケーと言ふものがある。又小さく深く造つて腰に結へ付けるに便利にした籠をテイルと言つて居るが、之が手入籠の約言であることは、現代の手提と言ふ語からも推定が行くであらう。其のテイルを腰に結へ付けてノビルやハルノゲシやヨモギ等を探つて居る田舎少女の群に、琉球の野ら道でよく出遇ふ此の歌の作者雄略天皇が、『菜摘ます兒、家聞かな』と言つて、親しく近づき給う

た昔の野趣満々たるベーゼントの光景が偲ばれてならない。

●●●●
ミフグシのミは接頭語で、フグシ（掘申の約？）は菜を掘取る時に用ひる木又は竹で造つたヘラのやうなものである。琉球では之をタイプクと言ふ地方があるが、之はテフグシ（手掘申）の意で、シの音が落ちて終つたのであらう。けれども汎くはテイビクと言つて居る。之はフがヒに轉訛したのであらう。交通不便な南海の孤島に孤島苦を嘗め盡した琉球民族は、極最近までも、此の原始的なフグシを農具として甘じて居たのである。近代文化の餘澤は、琉球民族をして農具の改良を思立たしめ、鐵製のカニテイビクを使用せしめるやうになつて來た。

家聞かなのナは希望を表はす助詞で動詞の未然形につく。琉球語にもさう言ふ形で盛んに使はれる助詞である。古義の未來の助動詞テムの約つたものであると説くが如き説は如何であらう。

たまかぎる

夕さり來れば

み雪降る

阿騎の大野に

はたすゝき

しのを押しなべ

草枕

旅やごりせす

いにしへ思ひて

ユフサリ來レバば夕方になるこの意。ユフサリはユフシアリの約つたもので、シは指示する意の助詞である。ユフサリのこを琉球語ではユフサンデイ又はユサンデイと言つて居る。ンは這入込んだ音で、リがデイになつた。ラ行音ミダ行音ミ混同してデイミ變化する例は琉球語には際限はない。序に言ふ、夕まぐれのこはユマングイミ言つて居る。

葦邊行く鴨の羽がひに霜ふりて

寒きゆふべは大和し思ふゆ

羽がひはハガヒミ訓む。羽合の義で二つの翼を言ふ。琉球語ではハニゲーミ言つて居る。

こもりくの

泊瀬の川に

船うけて

わが行く川の

川隈の

八十隈おちす

よろづたび

顧みしつ

ヨロヅは琉球でもユルヂと言つて居る。ヨロヅノモノと言ふこをユルヂナムンミ言ふ。八十も矢張ヤスと言ふ。二十(ハタチ)、三十(ミス)、四十(ユス)、五十(イス)、六十(ムス)、七十(ナナス)、八十(ヤス)、九十(ククノス)、百(ムムツ)と言ふ。猶單數の唱へ方を言つて見るこ。

タイチ、ターチ、ミーチ、ユーチ、イチチ、ムーチ、ナナチ、ヤーチ、ククヌチ、トウー、で十一のこは矢張ジフイチミ言つて居る。船うけるも琉球では船ウキユンミ使つて居る。

佐保川に

い行き至りて

我が寝たる

衣の上ゆ

朝づくよ

さやかに見れば

たへのほに

夜は霜ふり

サヤカは分明にさか、はつきりさか言ふ意 浩々照り亘つて居るやうな明月を、琉球でも『サヤカナ月』なご言ふ。

わが背子を大和へやるさ夜更けて

あかき露に吾が立ち濡れし

アカトキは明時の義で後世のアカツキ。琉球ではアカトウチミ言ふ。ンが這入込んだのである。けれぎも汎くは使はれて居ない。首里那覇ではアカチチ(アカツキ)を使つて居る。

青駒のあがきをはやみ雲井にぞ

妹があたりを過ぎて來ぬらし

アガキは足搔くここで馬の足の運を言ひ、人間が立働くここにも言ふ。琉球では何ちらにも使ふが、人間の足の運の意にも使つて居る。

天の下

奏したまへば

萬代に

しかもあらむこ

木綿花の

榮ゆる時に

わご大君 皇子の御門を
 神宮に 装ひまつりて
 つかはしし 御門の人も
 白妙の 麻衣着て
 埴安の 御門の原に

『木綿花の』はここでは『榮ゆ』の枕詞になつて居る。木綿は白木綿シラユフも白和幣シラニギテも言つて楮カウヅ(神麻カミツの義)の皮の繊維で織つた純白の布を言ふ。琉球にも楮の木はあるにはあるが、カウヅと言はずにカビギー(カミ木)と言つて居るから、之は後代紙の自給自足を奨励する意味から琉球政廳が植林されたものであらう。此の楮によく似た木で、現今では其の繊維で琉球表の經糸に使つて居るユフナ木と言ふのがあ
 るが、このユフナの木が琉球民族古代の衣服に其材料を想像せしめる木ではな

らうか。現代の琉球人は、主として冬は木綿物、夏は芭蕉物を身に纏ふやうになつて居るが、木綿織物は、儀間眞常ミマコノサトと言ふ人が、慶長十六年に、薩摩から木綿の種子を移入して、全琉球に傳播させて以來、琉球には擴つたものである。其の以前にあつては琉球民族は、木綿の織物の代りに麻の着物も着けて居たやうである。琉球の一地方には今でもカラムシを名産とする所があるから、古代琉球人もカラムシを栽培して、着物の材料をそれに仰いで居たのであらう。琉球で宮古上布のこみをフス(細麻の約か)と言つて居り、夏の白い芭蕉衣のこみをスドチラー(麻胴着の轉か)といひ、夏着の紺か水色かの芭蕉衣をタナシ(ンキヤナシ)と古は言つて居たやうで御着夏麻の轉訛であらう。之等は皆古代において麻織物をソミ言つて居たここの面影を遺し、延いては琉球古代民族が麻衣を着て居たこみを雄辯に語るものである。萬葉時代までは麻の糸のこみをヲミ言つたので琉球民族も矢張りヲミ言つて居た降つて芭蕉の糸を使ふやうになるに、それには單にヲウーミ言つて麻糸には特にマ

言ふ接頭語をつけてマーラウミ言ふやうになつた。けれどもそれも作物を栽培する農業の道が発達してからのこと、其の以前にあつては、食物の一部を山野に自生する雑草に仰いで居た如く、衣服の材料も山野に自生する得るに便利な植物に得たものではなからうか。而して古代大和民族が、楮の木に仰いで居たやうに、古代琉球民族も、このユフナ木に衣服の材料を仰いで居たのであらう、其のユーナ木は琉球では到る所に植付けられて居る。其の繊維では織目が極めて粗い織物しか出来なかつたのであらう。其の粗目の織物で如何にして冬の寒氣を防いだか言ふ疑問が現代の衣服を厚く恵まれた文明人の頭には浮んで来るであらう。六七年前までは高離島言ふ離島に行くに、冬でも芭蕉衣二三枚重ねて甲斐ノしく立働いて居る乙女の群を見るこゝが出来た。古代人は寒さに對しても頗る勇敢であつた事を想像するに難くないのである。次第に栽培術が発達して来るに芭蕉ばかりに材料を取り春夏秋冬の別なくこの芭蕉衣を常用したのである。近頃まで冠婚葬祭其の他の國家

的儀式に於いても、支那や日本から舶來した絹や木綿の衣の上から、このバサヂンを着けたものである。之は正しく、祖先の遺風を尊敬する傳統的精神の表現であつて、古代琉球民族の衣服をかいまみるに都合の好い材料である。このユーナ木については、伊波文學士のおもろさうし選釋の中に面白い議論があるからこゝに紹介するこゝにする。

沖繩ではユフナは世の初からの木と言つて珍重がり、神に捧げる赤飯なごも其の葉の盛る習慣になつて居る。東恩納文學士は曾つて沖繩の海岸の村落に與那、與那原、與那城ヨナシキなごがあり、その上ユーナがよく海岸に生ゐて居る所から、ユーナの語源を砂原又は海岸なごに關係があるものさされたが、私はそれには少し異つた考を有つて居る。日本の古語で木綿のこゝをユフミ言ふこゝや沖繩人が古來ユーナの繊維で布を織つたりするこゝから考へて、私はユーナ木の語源をこのユフノ木に求めたが、こんなものであらうか。それからユウナのユウは長く引張つてユ

ウになつて居るから、與那原なごのヨミは同一視すべきものではなく、その上かうして長母音になつて長く引つばる場合、沖繩語にはきつミハ行又はバ行の子音が隠れて居るからユウナはもミ、ユフナであつたミ推定する次第である。さういふところから考へて見るミ、和名を、ヤマアサ（山麻）としたのはいい思ひ付であるミいはなければならぬ。

妻もあらば摘みてたけまし沙彌の山

野の上のうはぎ過ぎにけらしや

●●●●●
タゲマシのタゲはタグミ言ふ下二段活用の動詞で食ふミ言ふこと。又食物を調理する意。轉じて注意する。看護する意を含むこともある。琉球語では食する意ばかりに使はれ、タグエンミラ行四段活用になつて居る。最も琉球語に下二段活用の動詞がないことは緒論にも言つた通りである。

タグを食ふ意味に解して居る學者は、加茂眞淵、鹿持雅澄、井上通泰の諸氏である

が、私は琉球語にもまだ生語であるから此の説を採り度い。髪を揚げる意に解する橘守部や加藤千蔭や木村正辭等の説は如何であらうか。

しぐれの雨まなくし降れば三笠山

木ぬれ普ねくいろづきにけり

●●●●●
シグレは和名抄に『和名之久禮、驟雨也』とある。此の時代からは秋冬の頃に降る小雨を時雨ミ言ふけれども、元來は頻りに降る大雨を言つて居たのであらう。琉球ではシグレミ言ふものなく、秋冬の小雨をシムミ言つて居る。琉球では霜ミ言ふものが見られないから、此のシムミ言ふ氷雨に霜の名殘を偲ぶばかりである。夏の夕立をナチグリミ言つて居るが、之は夏時雨の約であらう。昔は秋冬に限らず頻りに降る驟雨を何れもシグレミ言つて居たのであらう。又暖い所に惠まれた琉球人は雪を見たことがないから霰のミをユチミ言ふやうになつて居る。

しはすには沫雪降るミ知らぬかも

梅の花咲くふふめらすして

シハスハは十二月の異名。月の異名は琉球にはシムチチ（十一月）ミシハーシしか殘つて居ない。猶（チータチ）ツイタチは使はれて居るが、ミソカミツゴモリは遺つて居ない。外の月は一月二月と言ふけれども、シムチチミシハーシは決して十一月十二月と言はない。

黒牛がた汐千の浦を紅の

玉裳裾びきゆくはたが妻

たが妻のタは疑問代名詞である。琉球ではターミ長音にして使つて居る。裾もススと言つて居る。裾は單に衣のスッばかりでなく、山のスス、川のスス（川下のここ）村のスス（村ハヅレ）等とも言つて居る。

現身の命を惜しみ涙に濡れ

いらごの島の玉藻かりをす

ヲスは食ふといふ意味であるが、ヲシモノミして食物に言ふこも出来る。それでヲシアガルをヲシヤガルミして、食物を食ふここの敬語に琉球では言つて居る。

山邊の御井を見がてり神風の

伊勢處女共相見つるかも

これは山の邊の御井を見ようミしてやつて來たのに、圖らずも麗しい伊勢處女共を相見た悦を述べたもので、其の御井ミは山の邊に自然に湧き出でた清涼な泉であらう。古事記のミころでも説いたやうに、極めて古い時代においては、飲料水も用水も凡べて川の流れに仰いで居た。が段々山の邊に自然の泉を見出して、現今のやうに井戸を穿つて水を需めるこをしなかつた。随つて其の泉は、一個人の占有でなくして其の近隣、若くは其の部落の共同井戸であつた。琉球の田舎に行くミ村井ミ言ふのがあつて、自然に湧き出る泉がある。村中の處女共は、或は桶を頭に戴き、或は檐桶を荷つて朝に夕に其の井戸を目がけて集まる。其の井戸に行けば麗しい田舎處

女を見るこゝが出来る。随つて其處には戀の囁もあるであらう。奈良朝の貴族共が目のあたり眺めた伊勢の國の里少女共に對する感興は、洵に忘れ難いベ―ゼントであつたらう。

此の岡に草刈るわらはしかなかりそね

ありつゝも君が來まさむみまぐさにせむ

●●●●●
マ●グ●サは馬草で馬や牛なぎの飼料とするカヒバである。琉球ではマ―クサ―と言つて濁らずに言つて居る。國語での濁音が琉球語で清音になる例はいくらもあるのである。又家を葺く料にする草を、此の時代の詩人はマクサ（眞草）と言つて居るが琉球では其の草の事をマカヤと言つて居る。
●●●●●
ワ●ラ●ハは和名抄に『童、和名和良波、未冠之稱也。……童男童女也。』とある。琉球にてはワラバー、又はワラビと言つて居る。

埴安の池の堤の隱沼の

行方を知らに舍人はまぎふ

●●●●●
コ●モ●リ●ヌは琉球語ではクムイ（コモリ）と言つて居る。ヌは落ちて終つたのであらう。汎く池のこゝと言ふのである。太古は鬱蒼として水草が生ひ繁つた所に隱つた水を使つたから起つた語であらう。

すめろぎの

神の御子の

いでましの

手火の光ぞ

ここだ照りたる

手火（タビ）は葬送の時人々が手に持つ炬火を言ふ。琉球語ではテーと言つて一般に炬火を言ふ。テーの中に火の意味はあるから容易にテービーとは言はない。けれども俗にはテービーと言ふこゝもある。これはホタルが火垂（ホタル）の意でありながら俗に螢火と言ふこゝと同じであらう。

萬葉時代の葬送は夜中に行はれ、炬火、幡、楯なぎを持つものが行列をして従つたのである。これは先年に行はれた 明治天皇の御大葬を拜しても推察するこゝが出来る。現代琉球の葬式は、佛式に依つて晝間に行はれるのが普通であるが、子供の葬式等は大抵夜間に行はれる。田舎においては、此の時に手火の行列を見る。

.....

ひこみなに あれもなれるを

綿もなき 布かた衣の

みるのごこ わわけさがれる

かかふのみ 肩に打ちかけ

ふせ庵の まけ庵のうちに

ひた土に 藁解き敷きて

父母は 枕の方に

妻子ごもは

あごの方に

.....

ミルは海松ミ宛て藻の名前。海の岩について生ねる。枝はしげくて、緑色である。琉球ではビールミ言つて居る。春の頃になるミ珍味ミして琉球人の食膳によく上るものである。

カカフをカガフミして濁つて訓んで居る學者が多いが、萬葉假名も可布ミなつて居るし、琉球語でもカカフ(カコー)ミ言つて居るから濁らずに訓むのが古い言方ではなかつたらうか。琉球語では檻樓や襍裸をカコーミ言ふのである。

ヒタツチ(眞土)は俗に言ふツチベタ、ヂベタのこゝ。ヒタはヒタスラ、ヒタ使、ヒタカブト、ヒタバシリ、ヒタ濡なごミ同じ接頭語で専らの意。琉球語でも接頭語ミしてヒタオシ、ヒタグヒ、ヒタグナシ等ミ使ひ、ヒタニミして副詞に使ふこゝもある。

床が張つてないヒタ土の上に、藁を解き敷いて、家族一同の者が雑魚寝をする言ふことは、今の文化人には想像もつかない生活である。平安朝末期の歌にさへ

東路の埴生の小屋のいぶせきに

故里いかに戀しかるらむ

と言ふ歌があるから、況んや奈良朝時代の、しかも邊土においてをやである。琉球でも四五十年前までは、世の中の生活に疲れて、北國頭の山の奥に追込められた零落者の生活には、かうした光景を偲ばしめるものがあつたさうである。最も天惠の暖國のここであるからさうした生活もそれ程苦にならなかつたであらう。

天ざかるひなの長路を戀ひくれば

明石の門より大和島見ゆ

シマ(島)は汎くは四面水に圍まれた地域を言ふのであるが、時には大きな陸地中の一區域を言ふこともあつた。大和島の島も後者の義で、古くは住所ミカリミか言

ふ意にも使はれた。琉球人がシマと言つた時には多くは郷の意味で、海中にある離れ小島を特にハナリと言ふ場合が多い。佐喜眞興英氏の『シマの話』と言ふ本のシマもやはり郷と言ふ意味に使はれて居る。自分の郷里に歸ることを『島かいいちゆん』言ふ。又大里村と言ふことを大里の島といふ。

三熊野の浦の濱木綿百重なす

心は思へきたゞに逢はぬかも

ハマユフ(濱木綿)はハマオモトも濱芭蕉とも言ふ。暖國の海岸に生ずる常緑草木で琉球の海岸にも澤山ある。

こしのはにかくも見てしが三吉野の

清き河内にたぎつ白波

タギツ白波は激浪のこゝ。タギルと言ふ語は汁ノタヂーンなごミ琉球語でも使つて居る語である。

上つ瀬に

鶴川をたて

下つ瀬に

さでさし渡し

山川も

よりて仕ふる

神の御代かも

サデは小網のこご。和名抄に『佐天、網如箕形狭後廣前者也』とある。琉球ではサ
デイミ發音して、二尺四方位の荒目の布若くは網に二本の竹を取手ミなし、多少の
深さをつけた小網で、前方は廣く後方取手の方は狭いものである。新井白石の狭手
ミ言ふ説が或は語源をなすのではないだらうか。

もののふの

八十こものをの

うちはへて

里なみ敷けば

天地の

よりあひの極み

よろづ世に

榮む行かむこ

ウチハヘテのウチは接頭語。ハヘはハフで下二段活用の動詞？。延の意で長く引く
こごに言ふ。琉球では、糸や布や繩を長く引くこごに使つて居る。けれど之もや
はり四段活用になつて居る

沖つ波邊波しづけみいさりする

藤江の浦に船ぞさわける

イザリは魚貝を採るこご。語源は磯探（イツアサリ）の約略ミされて居る。琉球で
は夜間炬火を翳して魚貝を探りに行くこごをイザイミ言つて居る。初夏から秋の頃
に、浦々に百餘のイザリビが並んで居る壯觀は、南國名物の星空ミ相映じて實に詩
的である。猶琉球では、夜間に炬火をか、けて物を探りに行くこごをもイザイミ言

つて居る。この時には、男も女もサデイを持つて居るのは勿論である。

みよしぬの青根が峯のこけむしろ

誰か織りけむ經緯タテスキにして

ヌキ(緯)は貫く意で、織物の横糸のこと。琉球でもヌチと言つて居る。けれどもタテはタテと言はずにカシと言つて居る。語源は判明しない。

波高しいかに梶取水鳥の

浮寝やすべきなほや漕ぐべき

カチトリ(梶取)は舵取の意で。船の舵を執つて船の方向を示す人。琉球でもカチトウイと言ふ。

七日まで

家にも來ずて

うなさかを

過ぎて漕ぎ行くに

わたつみの

神のをさめに

たまさかに

い漕ぎむかひ

タマサカニはここでは偶然の意味に使つて居るが、汎くは稀にの意味に使ふ言葉である。琉球でも日常語としては使はれないが、琉歌には大分出て来る。那覇の俗語にタマサカと言ふ語を使ふことはあるが、意味は全く轉じてワザノと言ふ場合に使はれる。タマサカ注意したではないか等言ふ。

●イ漕ぎむかひのイは接頭語で、古事記と萬葉集に度々出て来る語であるが、日本の現代語としては残つて居ない。琉球語としては參れと言ふことをイモーリ、引繰返すと言ふことをイーケラスンと言つて居るが、何れも接頭語として遺つたものであらう。

ここ世べに住むべきものを劍太刀

しが心からオソヤこの君

オソは痴鈍なること、又痴鈍なるものを言ふ。琉球語で痴鈍なる者をウスーと言ふが決して普通のウスノロから來たのではない。鈍いと言ふことも、矢張形容詞としてウシサンと言つて居る。頭が鈍いと言ふこともウドウサンと言ふが之も此のオソの轉訛と見ることが出来る。

春日なる三笠の山に月の船出づ

みやびをの飲む盃に影に見ゆつ

ミヤビ男のミヤブは上二段活用の動詞である。ミヤブはしなやかにけだかい意である。琉球語には此の動詞其の儘は遣らないで、ミヤラベと言つて處女を呼ぶ語として使はれて居る。之はミヤブの語根ミヤに清ラのラのやうにラと言ふ音が這入りこんで女に連つたのであらう。そのミヤラメがミヤラベとして處女を親しみ呼ぶやうになつたのであらう。因に美しい女のこことをチュラライナグ（清ら女）と言つて居

るが、之も竹取物語や宇津保物語等に出て來る美しい意味から、男女の容姿に轉用されたのであらう。けれども矢張りチュラ布、チュラバナ等とも使はれて居る。

尤もこのミヤラベは中古文あたりによく使はれるメワラワ（女童）の轉訛かとも思はれるが、しなやかで氣高い處女を親しみ言ふ意味からミヤラメと見た方がよくはないかと思はれる。

山川にうへを伏せおきてもりあへず

年の八こせを我盜まひし

ウヘ（筥）は竹にて編み、山川等に伏せおいて魚を捕る具。和名抄に『筥は字部、魚を捕る筥也、筥は魚を捕る竹器也』とある。琉球では單にウヘと言はずにウヘク（筥筥？）と言つて、田舎では今でも雨後の小川によく見る圖である。所に依つてはアイクミ訛つて言ふ地方もある。何れにしても淡水魚を捕へる器具までも相似たものを使つて居たのである。

さ寝し夜は

いくらもあらず

はふつたの

別れし來れば

きもむかふ

心を痛み

思ひつつ

顧みすれぎ

キモは肝で古くは五臟六腑を言つたのである。原始人は心の働は此のキモから起るものと思つて居たのである。琉球人は心のこゝをチムと言ふこゝがある。そしてチムは凡べての精神作用を支配するものと思つて居た。可哀相だと言ふこゝをチムグリサン（肝苦し）といふ。チムイリ、チムヤチユン、チムスムン等は皆古くは本土に於いて使はれた語である。

オモフは古くは戀しいと言ふ意味に使はれるこゝが間々ある。琉球人がクヒ（戀）と言ふのは、主として情交のこゝで、いさしい愛人のこゝをカナシウミサトウと言ふ。サトウは郷、里の轉義で男のこゝ、特に若い男の謂である。

鷺のすむ

筑波の山の

裳羽服津の

其の津の上に

あこもひて

處女をここの

行きつぎふ

かがふかがひに

人妻に

吾もあはむ

わが妻に

人も言問へ

この山を

うしはく神の

むかしより

いさめぬわざぞ

今日のみは

めぐしもな見そ

こゝもこがむな

これは筑波峰で行はれたカガヒを詠じた歌で、このカガヒは春秋に日を定めて、若い男女が打連れて筑波山に登り、酒食を共にし歌を詠みかはして嬉戯し、又求

婚の媒もする、後世の盆踊である。東國ではカガヒ、都では歌垣と言つて居る。カガヒの語源について異説があるが、私は嚇呼の意で、聲を擧げて歌ひ合ふ様を言ふのであるこの高田與清の説を取る。此の風俗は東國のみならず、日本の各地に行はれたらしく、天皇が其の歌垣を御覽じた事もあり、九州の一地方には、今もなほ月に一回日を定めて雑婚が許される所もあるこのことである。魏志にも『其民喜歌舞、國中邑落暮夜、男女群聚相就歌戲』とあるから漢土にも行はれて居た風俗である。

琉球にも最近まで此の風俗が遺つて居た。舊の一二月頃、村の處女共が酒食を調へて若い男と野原（地方に依つては人家で）に行つて一日の快を盡す所があつた。けれども單に歌をかけあつて贈答して快を盡すだけで、別に雑婚するのではなかつたらしい。是が原形で、盆踊も盛に行はれて居る。又モーアシビーと言ふのが變形であらう。風紀の悪い部落になるに、夜若い男女が、野原か岡の上か墓場かに集つて伴つて、是等の淫風は全く地を拂つて終つた。

葛飾の

真間の手兒奈が

麻衣に

青衿つけ

ひたさ麻を

裳には織り着て

髪だにも

かきは梳らず

履をだに

はかずありけご

錦綾の

中につゝめる

いはひ兒も

妹にはしかめやも

望月の

たれる面輪に

青衿の衿の訓み方については、學者間に大分異説が多いやうだが、古事記の所でも説明しておいたやうに、琉球では今でもチンノクビと言つて居るから、私は契沖の説に随つてアヲクビと訓みたい。

又麻衣に青衿をつけたと言ふのも、今の日本の習俗から考へるに、少々珍奇の思をさせられる。之も琉球の風俗からするに何でもない。最近は極めて稀であるが今から十年前までは、黒衿か水色衿かの芭蕉の夏衣に如何にもハイカラさうにして居る田舎少女の群を見ることは、決して珍しくはなかつたのである。其の青衿、黒衿が決して經濟上からの打算でなくして、何ちらも趣味の上からの好である。同じ質の衣服に、同趣好の作り方は、民族服装史の上から興味多い問題である。それに履物を穿かないと言ふことも直ちに琉球の田舎乙女の群を想像せしめる。

ヒタサ麻のサはサ牡鹿、サ夜中のサと同じく音調を調へるための接頭語で、單にヒタラと言ふことである。琉球でもヒタ芭蕉で織つた夏着をヒタラウーデンと言つて居る。

天受の美貌を、粗末な麻衣と麻裳とに包んで、遠近から言寄つて來る若い男を惱殺して居た古の眞間の手兒奈の純朴な麗はしい姿を、私は南國琉球の黒衿の夏衣を纏うた少女の群に見出すことがまゝ、あるのである。曾つて東京市外高の臺の邊なる手兒奈堂に遊んで、目のあたり白粉臭い少女どもの姿を見せつけられた時、轉た今昔の感に堪へないものがあつたのである。又艶麗花を欺く田舎少女が履をだにはかずに素足で居たと言ふことも面白い。南島婦人が履物もはかずに、野ら行きは勿論市場にも大手を振つて行くと言ふことは、必ずしも南島人ばかりの特有ではないらしい。

マセ越しに麥はむ駒ののらゆれぎ

なほし戀ふらくしぬびかねつも

マセは籬のここ、言ふ和名抄に従ひたい。柵の内や籬の内を琉球ではマシウチミ
言つて居る。猶畦に圍まれた一區切の田をも一マシミ言つて居る。東京の芝居で一
區切の客席を言ふマスも之から出たのではなからうか。クベミか・ウマセミか訓ん
で居る説には従ひ度くはない。クベはカベ（壁）の意であらう。琉球ではカベのこ
こをクベミ言つて居る。

シヌブは忍ぶここの古音。古事記中にもシヌビく等ミ出て居る。琉球でも現に
シヌブンミ言つて居る。

處女らが 麻笥^{フケ}に垂れたる

ウミヲなす 長門の浦に

ウミヲは緒を細く割いて、長く縫り合はせて糸にしたもの。琉球でも芭蕉の芋を

しかするここをヲウ^ウムンミ言つて居る。麻のここを古語でヲミ言ふやうに、芭
蕉糸のここをヲウミ言つて居る。

藤波の 思ひまつはり

若草の 思ひつきにし

マツハルはマトハルミ同じく、物に絡みつくに言ふ語。琉球語ではマチブユンミ
言つて居る。

三もろの 神奈備山の

このぐもり 雨は降り來ぬ

トノグモリはタナグモリも言ひ、雲が棚曳いて曇るここ。琉球でもトゥヌグム

トーンと言ふ地方がある。

誰ぞこの屋の戸おそぶるにふなみに

わがせをやりていはふこの戸を

ヤノト (屋の戸) は家の戸である。琉球でも田舎に行くミヤードウと言ふ所がある。普通にはハシルと言つてゐるが語源は不明である。この歌の意味を味つて見ると頗る面白い。兩夫にまみぬまいとする貞女と、夫の不在を知つて人妻に言ひ寄らうとする多情漢とを戸の内外に立たせた、太古の新嘗の夜の光景が、一場の喜劇となつて眼前に展開される。儒教の洗禮を未だ十分に受けられない奈良朝の一般民衆、猶古い時代に於ては、このやうな喜劇は有り勝ちであつたらう。琉球でも五六十年前までは儒教の餘澤の薄い地方には、このやうなことを敢てする部落が、たまにはあつたこのことである。

家にありし櫃に鎖カギさし藏めてし

戀のやつこのつかみかかりて

ヒツ (櫃) は衣類を藏めおく匣である。唐櫃、長櫃なき言ふのがある。琉球の田舎ではフィチと言つて居る。首里那覇で筒 (ケー) と言ふのも同一物である。蓋此の筒は玉櫛筒の筒から來たのであらう。

琉球語で錠 (昔のカギのこま) のこまをサーシと言つて居るが、是は此の時代の鎖をサス (錠をおろす意) と言ふ動詞の名詞形が残つたのであらう。昔は鍵も錠も共にカギと言つて居たが、琉球では鍵のこまをサーシノ子と言つて居るから、元來はサーシもサーシノ子も均しく、サーシと言つて居た時代がなかつたのだらうか。加茂真淵は『むらたまの久留にくぎさし』と言ふ歌もあるから、此處の鎖もクギに訓むがよいと説いて居るが、現代でも一寸したものに釘を差込んでおいて鎖の代用にするところもあるから、矢張二つの歌はクギカギに訓み別けた方が可いかと思ふ。けれども古い時代における道具の締め物は釘であつたかも知れない。随つてカギの

語源もクギであるかも知れない。

醬酢に蒜つきかてて鯛もがも

吾にな見せそ水葱のあつもの

●●ヒル(蒜)は琉球のフィルのここで、ニンニクと別種のものではなからう。ニク
の類としてニンニクとは別の如く解く説には賛成しかねる。

ツキカテテのツキは接頭語、カツは交ぜ合はすここである。琉球語では御飯と一
緒に食べるオミオツケや煮物の類凡べてをカタイムン(カテモノ)と言つて居る。
又御飯ミカタイムン交互に食べるここには『ウブンミカタイタイカムン』と言つて
居る。

寺寺の女餓鬼まをさく大神の

男餓鬼たばりて其の子うまはむ

●●●タバリテは賜はりてである。琉球の田舎に行くに賜るここをタボーユンと言ふ。又

古くは雨乞をする時に雨ターボーレーと言つて居た。首里ではウの接頭語をつけて
ウタビミサフリと言つて居るが、之はオタバサフラへ(御賜べ候へ)の轉訛であらう

加島嶺の

つくゑの島の

しただみを

い拾ひ持ち來て

●●●シタダミは普通に言ふ、キサゴ、キシヤゴである。殻の形は蝸牛に似て小さく、
色は淡青色で美しい模様がある。琉球の近海に採るシチャダンである。

吾妹が額におふるすぐろくの

ここひのうしのくらの上のかさ

●●●コトヒノウシ(特牛)はコトヒとも言ふ。牡牛の殊に強く大きいのを言ふ。現に
各地方の方言に牡牛のここをコトヒ又はコタイミして遺つて居る。琉球でも牡牛の
ここをクタイー又はクタイーウシと言ふ。

うなる兒の

丹なす子等

丹つかふ色に

なつかしき

むらさきの

大綾の衣

ウナ井兒はウナ井（髻髮）に結つ童を言ふ。ウナ井は童男童女が髪を項ウナジに垂れて居たのをいふ。琉球では轉じて女の兄弟、即ち姉妹のこゝをヲウナイミ言つて居る。

ナツカシは親しくむづましい意に言ふ語であるが、琉球語では悲しい意に使はれて居る。カナシを琉球語ではカハユイこゝに言つて居るこゝは、前にも言つておいたが、全くナツカシに反對の使ひ方になつて居るこゝは可笑しい。

オホアヤのアヤは元來は文アヤを織出した美しい布のこゝであるが、琉球では立編横編のこゝをタイアヤ、ヌチアヤミ言つて、普通の編のこゝを言つて居る。編物の織方は日本に於いては中古になつて南蠻諸島から渡來したので、島物の意味から

シマミ言ふ語は起つて居るのである。だから古い琉球にシマの織方はあつても古いアヤミ言ふ語で言はれて居るのは無理もない。

沖行くや赤ら小舟につみやらば

若しも人見て開き見むかも

アカラ小舟は丹塗の美しい小舟である。古事記のこゝろのアカラ女郎は、紅顏の少女を言ふのではなからうと、琉球語のアカラ鳥、アカラ豚の例を擧げて論じておいたが、此處では丹塗の麗しい舟ミ言ふ説に賛成する。琉球語にも赤く華かに麗しいものを見て、アカラフタラミかアカラクハハラミか言つて居る。

ツトは苞直で元來はツツムの意で、物を藁でツツムこゝである。轉じて其の土地の産物を藁で包んで携へて行く物に言ひ、猶轉じて汎くミヤゲモノのこゝをも言ふ琉球にても何の意味にもチトウミ使つて居るが、田舎からの正月の鹽豚や卵等に古風ゆかしく藁包のものを見るこゝが度々ある。ナーギムン（ミヤゲモノ）ミ言ふ語も